

大僧正旭日苗師監條

古今 大家 說教演說集第一輯

代價送料共 金一圓八錢

久しく品切れの本書第一輯四版は製本出来せり
同第二輯より第四輯に至る残本あり品切れとならぬ内
御購求あらんことを

東京芝區二本榎一丁目三十八番地

發行所 妙 教 社

(振替東京二〇二五六番)

虔 告

各地方より御通信或は編輯及事務上に關する事は總て
小子宛御發信相願度右に關し他同人へ御發信相成候時
は御返信の時間少々相遅れ候様に相成申すべく候間此
儀豫め御承知置願度敢て虔告候也

統一編輯部

三 上 白 碧

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可(毎月一回)
大正元年十月十五日發行統一第一一二號(十五)

謹 告

東京府品川本光寺

改名日誓 今 成 乾 隨

東京府品川妙蓮寺

改名日堂 笹 川 眞 應

今回頭書の通改名候間道俗諸賢へ謹告候也

謹 告

聖日什上人の靈蹟地たる妙法寺本堂は今回新築工事成
り來る廿七日より三日間開堂式を舉行候間御參詣有之
度此段謹告候也

會 津 妙 法 寺

(東京 三益印刷株式會社印刷)

統一

第 貳 百 拾 參 號

桃山奉送の記

文學博士 姊 崎 正 治

氣質と宗教

マス、スター、柴 田 一 能

觀心本尊抄綱要

大僧正 本 多 日 生

釋尊と當時の世界

帝大法科生 松 浦 道 熹

折伏餘論。活動史



く 云 人 上 蓮 日

然れども大智慧の者ならでは日蓮が融通の法門分別し
がたし然る間まづまづさしをく事あるなり立正安國論
の如しいふといはざるこの重罪免れ難し云ふて罪のま
ぬがるべし見ながら聞ながらいませしめざる事眼耳の二
徳忽ちに破られて大無慈悲也

觀心本尊抄綱要

日蓮上人の學風は頗る冷薄にして健全なる頭腦
にあらずんば理解し難き事多きも公正なる態
度を以て上人の著作を窺はば其概念網羅を會得
し日蓮主義の識見を涵養することを得べし本論
義は某講習會に於て講述せられたるものにして
本だ其校閲を経ざるも現代思想界に對つて開顯
統一の教義を示し其歸着を明かにするの急務な
るを信じてこゝに掲載することゝなしぬ

三上生

緣起

大雷正 本 多 日 生

本抄の緣起は副狀に據て大要を知ることが出来る、
御達作の年代は本鈔卷尾の日附の通りで、御年は五十
二歳の時である、副狀の中に此事日蓮當身の大事也と
あるが、此は余の考では佛勸を奉じて出現せられたる
佛教統一の任務、日本乃至一閻浮提末法萬年の模範と
して大徳教を建設されることを指すのであると思ふ、
佛教と言つたからとして佛陀の説かれた經説のみではな
い、其中には人生の一切の事を包括して居るのであ
る、而して其大事業中の第一中心となるものは大本尊

の光顯である、人類思想の統一は學問では眞理、倫理
では教訓ではあるけれども、佛教では信仰にあるので、
此信仰中には道德教訓も哲學も眞理も皆包容されて居
る、で此信仰には本尊の光顯が第一要件たるは言ふを
俟たない、故に簡單に云へば、上行の天分、本尊の光
顯が其大事である、本尊には佛滅後二千二百二十餘年
未曾有の大曼荼羅とあるが、全く佛陀出世以來信仰を
捧ぐるに慥る完全なる對境は未曾有である、而して其
大本尊を顯はすに先立つて自ら之が解釋を施されたの
が本鈔である、なほ本抄以外に本尊得意抄なる一書が
あるけれども、此は天臺過時の迹門を修業することを
誡められたもので、本抄とは何等關係の存するもので
ない。

さて本抄中肝要なるは三寶と吾人との關係を明示さ
れたる點にあるので、



開目抄講述の時に云へる如く、宗教の本質としては吾人と本佛との關係にあるので、これが本法及び本化に關係して來るのである、吾人と最も近き關係を有するは日蓮聖人で、今の遣使還告とは地涌なりとて本佛が日蓮を使はして、此間の繋がりをつけられたのである、そこで開目抄と本抄とは別に其趣意の變つたのではなく、開目抄は前述の如く何日死んでも宜いやうに大事の法門を書き盡されたのであり、本抄は當身の大事であるから共に最も注意すべき御書であると信する、而して此兩書の第一義たるものは何であらうか、曰く一念三千の精神的關係にある、天臺に於て説く一念三千は吾人と佛陀との必然的關係であつて、これは宗教の基礎的の理論に過ぎないので、宗教の本質ではない、日蓮聖人の解釋せらるゝ一念三千は、佛陀の大慈悲と之を渴仰する吾人の精神との關係する所にあるので、是れ即ち宗教の本質たり且つ尊い所であることを忘れてはならぬ、そして此繋り處が妙法蓮華經の五字に依るので、これは受持の最良形式として結要されたものである

る、又吾人の一切行一切願皆此一點に聚まり、教の手も出離の手も此處に繋がるのである、されば開目抄も本尊抄も一點の相違點の無いことが解るであらう。然らば本抄が宗學上の位置は如何であらうか、其は開目抄と同等であるけれども、開目抄の方は記述が明晰であるから一切の教義を判斷するには適當であるが、本抄は開目抄に比して今少し明晰ならざる點がある、故に研究上の得失から云へば開目抄を最上とせねばならぬ、が併し本抄の特色とする重なるものは三點ある即ち

特色 本尊異争の解決

信知二行の統一

是れである、第一の本尊異争の解決とは、本尊を解する概念に就て御道文中矛盾の如く見ゆる處がある、即ち本尊問答抄には妙法を本尊とせよとあり、取要妙中には教主釋尊を本尊とせよとあつて、古來甚だしき争論のあつたのは事實でもあり、今尙其餘波を受けて明確なる意識を得て居ないものもあるので、元來さした

る價值のある争論でもないが、兎も角も本抄に依れば明かに解決が付けられる、此點は開目抄の本抄に及ばざる處であらう、次に第二の信知二行の統一とは、聖人は決して智慧を捨てられたのではなく、智慧の極處に信仰を立てられたので、一念三千の法門をふりす、ぎて書きたる大曼陀羅なりとは此間のことをいふのである、故に真理の極處、理性の極點に立てたのが日蓮主義の信仰であると言はねばならぬ、されば信知の二行を合せたる信仰といふべきである、此を妙信とも大信とも圓信とも統一信とも謂はれるであらう、喚言すれば知情意の共同作用とでもいふか全意識の發現であつて、決して知を捨てたものではない、尤も知情意が等分に含まれて居るとは云へないが、其多少こそはあれ此三が融合されて居るものである、觀心とは是をいふので又立正觀と言はれた所以である、で、此全意識を世には睿智とか聖智とか言ふのであるが、此智を信に代へた意である、儒教でいふ誠も同じで、なほ言ひ換へると天臺の純知的なる智行と淨土門の純信的なる信

行とを統合したるものと言ふべきである、以上に依つて本抄は本尊の解釋と信知妙行とを教へたものであることが解つたのであらう。

大要

初めに天臺の一念三千の出處を考へて萬有相關の真理を教へ、佛教真理觀上の留をさしたものである、例せば小乘の業感緣起の説も此一念三千の中に含まれて居る、即ち十如の因果の中に向下的なる罪惡によつて苦果を感じ、向上的にして佛菩提に向へば佛樂を得る、又願耶緣起とは願耶とは一切の合藏を意味するのであるから、往いては一念三千の一念と異なる所はない、或は眞如緣起の差別平等隨緣不變との意義は一念三千の互具互融の意義の中にある、或は又華嚴の法界緣起無盡緣起、眞言の六大緣起等は三世間の國土世間五蘊世間の中に一切は包容されて居る、四行目の問曰からは天臺が一念三千を以て一代佛教の本意を現した、説已心中所行法なることを明し、九二九三行夫智者弘法云々よりは一念三千とは草木國土も互具せりと説く色心

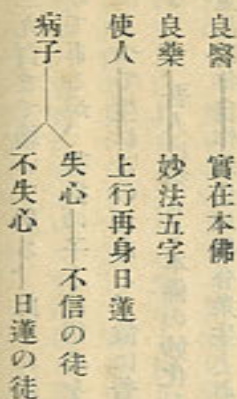
不二の一元哲學なるを明すのである、故に木畫の二像を本尊とするも可い、寧ろ世に木畫の二像を本尊として居るが、其は此眞理觀に據らねば成り立たないのである、次に九三〇五行の問曰、出處既聞之から百界千如、一念三千也までは觀心の意義を明したのである、觀心とは内省法の意で萬有を心外無別法と見るのである、併し此中に心得て置くべきことは吾人の劣心に尊特佛を具有せるや否やといふ所が觀心の出發點たることで、開目抄に一念三千は十界互具より事はじまると仰せられたのはこゝで、絶待と吾人との關係を説明するにあることである、次に問曰、法華經より九三六六の佛界所具十界也までは一念三千の經文の出處を明したのであるが、又吾人には十界を相互に本具せることを明したので、開目抄の九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に具すと云はれたのと同じである、而して此中に開佛智見の文を引證してあるが、此開の字が實に宗教的の意義があるので哲學的の解釋ではたゞ本具を論じ必然的關係を明すだけであるが、宗教的には此開

九三九頁まで續いて居る、此中に國王と夫人との譬を擧げてあるが、菩提の子とは信心をいひ、國王と夫人とによつて生れるのである、故に普賢經に従方等生とある、で、吾人は須らく本佛の妙化を知らねばならぬ、善量品に每自作是念以何令衆生とあるが、是念とは本佛の意で、何とは現身の佛身を以てし又は説法の教法を以て衆生を教化せらるゝ事である、又「本有三因中に於ては了因佛性が最も尊いのであつて、正因佛性とは素質即ち儒教でいふ明德の如きもので、緣因佛性は此明德を明かにする資助であり、而も了因は其資助中最善なるもので、本佛によつて顯はるゝ信心を指すのである、故に三因中には了因を最も大切とする、更に進んで言へば妙法五字を此佛と吾人との中間に入れて、受持を以て吾人との繋がりをつけるので其の受持とは即ち信念である、而して此妙法五字には釋尊の因行果徳の二法を具して居ることは勿論である、換言すれば佛陀の大慈悲と吾人の向上心とが合する處が妙法五字である、で其受持の信念と讓與の大慈とが即ち精神的

くといふ向上的な努力に其意味があることを知らねばならぬ、又問曰から九三三三の具足佛界故也までは十界互具の事實を論するので、前のは經文の證を擧げたから善量量であり此は現量である、此から九三三三の可信之也までは吾人の劣心にも佛性を具せることを明し、水中の火火中の水信と難しと雖ども千尋の水の底にも火ありとなし、而して涅槃經の悉有佛性を證明するのであるが、此の「我等劣心具佛法界」といふ文が最も着眼すべき所である。問曰から九三四四の不可信之までは論所具の事佛を擧ぐるので、萬有神教的に云ば、一塵一石も神であるが、聖人は必然的關係より精神理關係に移り、理佛より事佛に移つて論せらるゝ所が尊いので、吾人にも具體的人格的の具せることを證するので、理論上の互具を究局とするのでは無い、是れ聖人獨特の觀察であるから「自之堅固秘之」と傍注まで入れてある、次の以、此から九三六六の何所示までは諸經の佛身觀を述べ、それから十四行目の内典聖人也までは精神的關係を述べたもので、此問題は

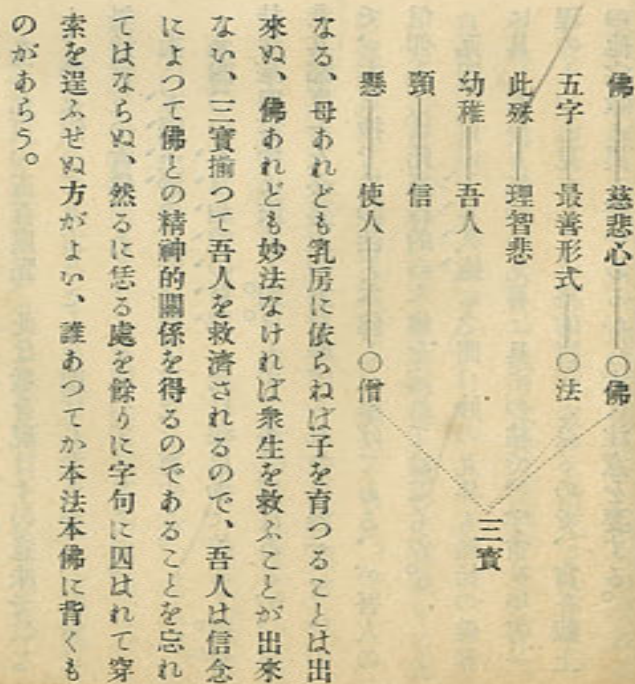
關係であつてこゝに妙信がある、大凡佛智といへば眞理を包んで居り慈といへば智と理とを包容して居る、而して其慈は活動性のものであるから發動して慈善根となり、此慈善根は功徳を生み、其處に力を有つて居る即ち佛力となる、故に因果の功徳といへば一切のものを包含して居る事を注意せねばならぬ、然るを妙法といへば眞理のみなるやうに考へて居るのは誤である。次に及三九十一の夫始から九四〇二の故歎までは本國土を論じたので、日蓮主義の本國土とは單穢土單淨土にあらず、本時と娑婆との統一土である、而して佛の實在常住なるが故に土も亦常住なので、淨土宗などの淨土は能居の佛が無常を免れないのであるから、淨土も隨て無常であると論破するのである、其次からは此教は付屬を明し、其本尊爲體からは本尊の相を示されてある、妙法は佛陀と吾人との接觸の最勝形式であつて、佛陀は中心である、善量品は即ち佛を中心としての説相である、又法蓮妙には、佛は母、五字は乳房、赤子は吾人として解釋してある、若し妙法を本佛

と離して説かうとするものは眞言の阿字觀と似たるものであらう、次は問、正像二千餘年間から九四三六の尙劣旃陀羅までは序正流通を明し種熟脱を論じ、眞實の種熟脱は久遠無始の化より始め、無終不滅の終を認むるにあらざれば眞の種熟脱ではない、之を知らねば小乗の灰斷に同すと決し、次下よりは此佛教を昔の古物と見るか否かによつて在滅判を爲すので、經證を擧げて未法爲正とせられた、而して彼脱此種とは機に約していつたので、佛と日蓮聖人との比較でないことを心得ねばならない、そして問曰、其證文如何からは又重ねて經證を擧げ、九四四行^{十一}の問曰、此經文から南無妙法蓮華經、是也までは使人と良藥とを擧げた、此を圖示すれば



受的ではあるが、普通に言ふ言論中の攝折ではない、即ち武力を折伏とし言論を攝受とせられたのである、故に完全なる國家には正法あり正法の中には完全なる國家があるべき筈で、其内面は相一致して居る、次の問曰から九四九^{三行}の先兆歟までは本尊の顯現を明すので、此中には甚深なる意義を含蓄して居ることを心得ねばならぬ、一閻浮提第一本尊可立此國などは日蓮聖人にあらずんば言ひ能はぬ言であると思ふ、此處の意義を充分に研究したならば、すればする程限りなく光輝を放つことであらうと信する、次に可得世法歟までは世出一貫の義を説かれたことは本文の有名なるに依つて言ふを俟たぬことと思ふが、當時の天變地天も上行出現の先兆なることを天臺妙樂の論證によつて證明されたのである、而して是から終までは三寶の調和を明して本尊を結策せられた、此中「佛起大慈悲」の文を左に分解して見ると

となる、次に此良藥より九四六^{三行}の掇拾遺囑是也までは妙法の付屬を明して、其妙法五字の内容は神力品に於て説明せられ、而して其功德は説くべからずとする、其内容は暫く如來一切所有之法如來一切自在神力如來一切秘要之藏如來一切甚深之事に結要して説くも、實は言説の盡くす能はざる所である、秀句に於て其上に一々果分と冠してあるのは凡て如來を通してなければならぬことを意味して居るので、一々に果分と言つたのは大に注意を要する所である、次の疑之から前四味機根也までは大白法出現の時を明し、像法中未から九四八^初の我弟子惟之までは本尊と題目とを説明して、天臺は理論的には明したが、未だ宗教的に其最善形式の題目と本尊とを説くに至らなかつた、之れまた時機の至らなかつた爲めでもあるとせられた。其より五行目の弘持正法に至るまでは、法國の内面的一致を明して、此大徳を弘持するに一面には國王となつて出現する形式と、一面には僧侶となつて出現する形式との二方面とがある、前者は折伏的で後者は攝



着眼點

本抄に對する着眼點中の着眼點を述べて置かうと思ふ。

初に觀心の意義を知らねばならぬ、觀心とは吾人の心と尊き佛陀との迷悟の關係を觀ることで、即ち迷中

の吾人中に完全なる佛陀を見出すことである。

九三六頁に至つては觀心の意義の發展である、佛陀と吾人との關係を一層深く即ち國王、夫人と所生の子の如くに觀るので、此は理論的に必然的關係を謂ふ其上には精神的關係を見出したので、實際的に發展した眞理觀上の達觀である、吾人は信る眞如實相の中に活動性の意義を有して存在し、常に向上向下の二活動の絶へないものである、茲に宗教的の眞價あり日蓮主義の天臺よりも百尺竿頭一步を進めた所以が存するのである。

九四二頁の種熱説を論ぜざれば灰斷に同する、即ち本佛を意識せざれば其より生るゝ信仰は譬へは旃陀羅にも劣るものである、天臺は眞如を重く見て本佛を主とせなかつたのは王女の畜子を生んだものであらう。

此と同意義では九三八の「速疾頓成説之亡失三五」速化・化道始終・跡不見の文で、久遠以來の權化の活動、大慈大悲の發動を意識せなければならぬ意を謂つたのである。同頁の「私加會通」の下の文であつ

同頁の五種の五重三段、此は聖人の教判で毒量の眞意義を見て來るので、佛教統一の中心を定むるに重大なる達觀法である。

次には九四二頁の末法爲正、こは凡て釋尊の説法を遠くせず自己の上にとつて感ずるので、國を以て謂へば我國、時を以て謂へば末法、末法の中にも今日、として感ずる聖人の活きたる解釋である。

同頁の種熱説の聖判、之に就て釋尊と日蓮聖人とを三益に配して混亂を來して居るものがある、興門派の如きは特に甚しい、釋尊を脱佛とし日蓮聖人を今日の下種の佛とするなどは決して聖人の意ではない、釋尊の化導は無始無終で十方法界に遍滿して居る、決して昔あつて今ないといふやうな化導でない、常住實在にましますのであることを忘れては不可い。

九四四頁の今遣使還告地涌也、に就て良醫と良藥と使とを混同せざることを、使は日蓮であつて前に良醫があるから、此使と良醫、即ち佛と日蓮聖人とを混同してはならぬ、又良藥に就ても依諸經方の時は

て、妙法を色々と解釋するが、詮する處其内容は釋尊の因行果徳で、此中には一切のものを具足して餘す所はない、故に妙法を信するものは釋尊を敬慕すべき等であつて、毒量品にも父を慕ふが故に良藥を飲むとの説相になつて居る。

九三九頁の五百塵點、此は數を現はすの意味ではなく、數を假つて其古きことを顯はしたまでい、其實は無始實年の古佛であることを誤つてはならぬ。

次に本國土妙の一段は特に研究を要する。

九四〇の本尊相貌の解釋、此は報恩妙に依ると釋尊持法華問答抄に依ると題目とする等差別はあるが、畢竟其都度々々必要上一方を擧げられたに過ぎないので、本尊抄では妙法と本佛とを擧げてある、が吾人の信仰上には此絶待的の本佛を忘れてはならぬ。

九四二頁の十界久遠に之間日妙の九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に具すの格で、宇宙を平等一理のものとして人格的實在と見るので、實在觀上の他宗教と異なる所であるから大に注意を要する。

他の一切經に通するが、此は撻笮和合といふのであるから、其純の純なるものを撻ひ取つて消化されたものである、即ち依諸經方は一般の食物、撻笮和合は消化、良藥は乳汁である。

九四六頁の果分の法、是亦本佛を通じて寫象する處の眞理と異らぬ如實の知見をいふのである。

九四六頁の有圓機無圓時、今末法は圓時にして正しく大法の建設さるべき時である、さればこそ天臺も傳教も末法を戀ひ慕はれたのであらう、現代の學者の中にも現代を悲觀する人もあるやうだが、其人達は現代こそ大法の建設さるべき法運佳會の好圓時たるを知らぬからである、なほ此機と時とに就ては撰時抄に於て述べた相違のあることを見逃してはならぬ。

九四八頁の地涌千界教主釋尊初發心弟子也、とは他抄に、「五百塵點劫より已來一念も佛を忘れましまさる大菩薩なり」とあると云ふのである。

同頁の一闍浮提第一本尊と及び法國内面一致は共に大要に於て略説して置いた。

天晴、地明の文によつて一方よりは天宗教の建設であり、一方より見れば大徳教の建設が聖人の任務であつた事が解る。

上人の抱負 蛇は自ら蛇を知ると述べ、當時我國の悲風慘雨は是れ大徳教の現はるゝ前兆なりとせられた其遠大なる抱負と、其高邁なる警眼とは以て畏敬せざるを得ない。

三寶の調和關係 吾人の苦難を救はんが爲めに佛陀大慈悲を以て此妙法を授け玉ふた、而して此妙法を授ける爲めに上行再身日蓮を遣はされたのである、されば之を一體三寶と見るにあらず別體三寶と観るに非らず、佛を思ふ時は必ず妙法を信じ、妙法を信する時は又佛を慕ひ宗祖を思ふので、此間自然の調和は無限の裡にとれて居る、別に彼此理屈を付ける必要はない。

古來の争點

次には古來の主なる争點を摘解して置かう

(1) 人本尊 と法本尊との争、人は實在の本佛、法は妙法であるが、これは乳と母、良醫と藥との如く見るべ

信仰を把持し、佛陀宗祖の精神を心として、國を思ひ人を憐む大慈悲心を起し、此大徳教を日本より世界に宣傳する佛祖の天業を紹繼し、三界佛國の實を擧げねばならぬ、力の小なることを慨いてはならぬ、徳の薄きことをかこつことはない、碧蘿懸松頭、延千尋、安國論の勸奨に随つて振起奮闘、吾人が小日蓮となつて聖圖を遂行せねばならぬ、かく自覺すれば愉快なる苦闘をも續けらるゝのである、如何に高尚なる學問でも信仰でも之を實行せざるに於ては何等の價值もない、區々たる學争異説に纏綿して居るのは日蓮主義者の取る所ではない、誠意誠心を以て進むべきである、軍人に賜はつた五箇條の勅語の一誠忠を基礎とし貫かるゝが如くに、何程技良あり才能あつても此誠を缺き報恩慈悲の念たに無かつたならば、終に何事も得る所なくして終るであらう、少くとも聖人の教を奉ずるものは、此精神を忘れず、聖人の眞主義を味ひ且つ宣傳することに心懸けることを希望して止まないものである。

きものであつて一方に偏よつて見るのは不可い。

(2) 信知行の争 此は前にも述べた通り知識の極處に信行を用ゆるので、信知の融合されたものが聖人の信仰で、是亦一方に偏すべきものでない。

(3) 種熟脱に就て 今日ば下種益の時ではあるが、別に釋尊以外に下種の師がある譯ではない、日蓮聖人を末法下種の師となすなどは大なる誤である、釋尊は實在不滅であつて今とても下種の師たることは定まつて居る、餘り一局部に拘泥しないやうに觀るのが肝要であらう。

(4) 天台の一念三千觀 天台は哲學的必然的に萬有の互具を見るので、日蓮聖人は宗教的に精神的に其關係を説くのであることは、上來既に述べて置いた通りである。

なほ數へ舉ぐれば種々説明しなければならぬことも甚だ多いが、兎も角もこれで講演を終ることとする、が併し聖人の一貫せる理想は天晴地明にあることを忘れてはならぬ、世法と佛法と融合されたる上に健全なる



氣質と宗教

マスマー、オプ、アーク 柴田 一 能

米國ハーバード大學の名譽教授でフェームスと言は
い、誰でも知らぬ者はない、有名な心理學者哲學者で
國民が去る明治三十七年十一月十二日ホストン市のロ
ウエル學會で、始めて發表したプラグマチズム(實
用主義)と云ふ講演が、如何ばかり當時の學界に多大
の反響を喚起したかと云ふ事も、今尙吾々の記憶に新
たなる所である、其中の一節に……

哲學の歴史は大部分は人の氣質の反對衝突の歴史な
り、斯く言はば學者をして、或は哲學の威嚴を傷つ
ぐるものと思はしめむも、予は飽くまでも此の氣質
の反對衝突と云ふ事實を以て、多くの哲學者の異同
學說分岐の大半を説明せんとするものなり、(中略)勿
論一哲學者が哲學的考察を試むる際には、勉めて自
己の氣質でふ事實を顧みざらむとす、氣質は實に使
宜上假認せる論據にあらず、從て哲學者が其說の結

論に於ては、偏へに主觀と没交渉なる論據のみを推
し立て、之を以て氣質を壓せんとす、然し事實に於
て哲學者の氣質は其立てたる客觀的前提の何れより
もより強き根底を形成す、約言すれば彼は常に自己
の氣質に信賴しつゝあり、斯くて自己の氣質に適せ
る世界を見出さんとするの極、自己の氣質に適する
世界の假現世界の姿を信じて此中に安住す、故に若
し自己の氣質と相反するものを見んか、此人や世界
の真相を洞察する能はざるもの、甚だしきは哲學界
以外の人とさへ考ふるに至る云云。

と道破し居るが、此の如き見方は獨り哲學思想の消長
典廢を取捌く上に便利(所謂實用的)であるのみならず
文學美術、政治宗教、風俗習慣の未に至るまで、所有
人心所産の現象を分別するにも亦必ず其の効果の多か
るべきを疑はぬ。

學說主義の相異とか意見の衝突とか云ふものは、何
れの國何れの時代でも絶えぬもので、政治上では進歩
と保守、官僚派と民主派の争ひ、文學上では理想派
して一應の捌きをつけると云ふ事は、誠に便利で且つ
面白い造り口である。

然るに人間の心的生活の事實を研究する心理學に於
ては、古來氣質を分つて四つとして居る事は諸君の御
存知の事と思ふが、順序として一應の説明をして見や
う。

(第一)多血質 此體質は血液の補給が迅速であつて
顔色麗はしく、主として丸顔で、物に感じ易い
が又忘れるとも早く、言はば藥罐の様な質で沸
くのも早い代り冷るのも疾い、常に快活の狀を
保ち俗に謂ふ血の氣の多く扇動の利く方で、氣
早なれども極めて樂觀的である、其長所を言へ
ば鋭敏、其短所は輕卒なり、才子肌、世才家、
感情家、空想家、肉慾に耽溺れる人等は此氣質
に屬するので、佛蘭西人は其最も有名なる標本
である、人物では平相國清盛、足利義政、織田
信長、漢の武帝、唐の玄宗皇帝など、遁れつこ
のない所である。

と寫實派との軋轢、藝術上ではクラシクとロマンチ
ック、舊劇と新派、洋風と國風との衝突、思想上では
永遠の真理を主とする唯理論と現在の事實を重んずる
經驗論との浮圖、風俗上では小笠原流と山出し流、山
の手風と下町風との懸隔と云ふ様に、毎に二つのもの
が互に睨み合ひ角突き合をして居るが、是等は孰れも
皆氣質の相異に其根源を發して居るとして見ると、實
に解りが早いのである、そこで博士は人々の氣質を根
本として古來の哲學說を分けて、軟派(tender-minded)
と硬派(tough-minded)の二つとして居る、表にして見
ると左の如き色分となる。

○軟派—唯理的—主知的—唯心的—自由意志論的—
獨斷的—一元論

○硬派—經驗的—感覺的—唯物的—宿命論的—懷疑
的—多元論

飽くまでも理觀を主とする天台が唯理的の軟派で、事
行を推し立て、進む日蓮が經驗的の硬派、舊佛教が獨
斷的教權的の軟派で、新佛教が懷疑的研究的の硬派と

(第二)神經質

多血質の樂觀的なのに比べて悲觀的幽鬱であり、多血質の早くして弱いのに比べて早くして強い精神力を有して居つて、俗に謂ふ苦勞性の事である、深沈寡黙なる故輕佻の恐れは無いが兎角引込み思案、隱遁主義に流れ、保守的で進取の氣象に乏しく、思慮は如何にも緻密ではあるが、肝心の實行力に缺けて居る、顔面は圭角が多く全身瘦せ方の者が多い、普通智慧者と云ふのは此の質で、策略家、慷慨家、熱誠家、精神家、歴世家、懷疑家などは之から出て居る、猶太の豫言者エレミヤ、希臘の詩人ホーマー、伊太利のマンテ、獨乙のシルレル、支那の屈原、陶淵明、杜子美、我邦の菅公、鴨長明などは動かぬ所である。

(第三)胆汁質

筋力強健で、血液の運行も盛んに、志望膽氣大きく且つ之を強行する忍耐力にも富み如何なる抵抗力にも屈せず、事に當つて熱情溢るるばかりである、俗に謂ふ剛膽とか腹の大き

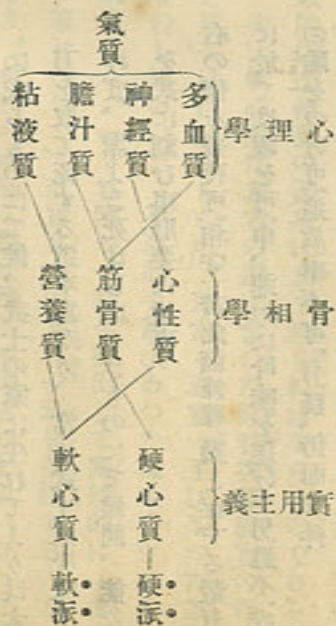
(第四)粘液質

血液の運行が極めて平靜であつて、粘液の性強き者は重々しくて遲鈍たるを免れない、併し其質の適當なる者は平凡なれども忍耐力には富んで居つて、俗に謂ふ實體の人となるのである、推して言へば愚人肌とも稱すべきもので、總じて慾氣の薄い樂天家は此の仲間で、善い方では君子、善人、篤實家、實體な人、正直者、律義者、段々下落すると後生樂な人、恬淡家、冷淡家、お心よし、薄野呂、甲斐性なし更に下落して間拔、拔作、ボンツク、ばん太郎長松、頼間、愚圖、意地無、グーッラ兵衛、お引指など随分有りがたくない連中が輩出する、上の部には米國の華聖頓、支那の孔明、日本の家康を始めとして下の部には下女、下男、丁稚なども其實例が多い。

右は四質の特色を略述したに過ぎないが、之をお互の氣質持ち前に比較して、果して自分は何質に屬するものであろうかと判断して見るのも一興であらう。

な人の事で、多血質と同じく鋭敏ではあるが難に臨んで動かざる事泰山の如く、神經質の如くに幽鬱でなくて而も思慮に熟して居る、言はゞ運くて強き精神力を有して居るのである、其短所を擧ぐれば極めて主我的で同情の念に薄く、古來英雄に此質が多い、俗に豪傑肌とか言ふのは此質から出るので、大企業家、充分に斷行し得る事業家、沈着して大事を行ひ得る人は何れも此質に屬するもので、彼は眞に落着いた人である、眞面目に仕事を遣つて屹度成功するに違ひない杯と善評られる、其代り大泥坊も大罪人も之から出るので、面の皮の厚い、圓々しい、押の強い奴、糞度胸が据つて居つて思ひ切つた事を爲し、非を遂げるなども此質の產物である、著しい例は羅馬のシーザー、魏の曹操、唐の太宗、豐太閤、武田信玄、上杉謙信、近代では自由黨の星亨君などで、星亨君は即ち押し通るなりとの評は當時有名な話であつた。

偕てアラグマチズムでは、氣質を二つに分けて硬軟の二派として居る事は前に述べた通りであるが、ガルの一派の骨相學(性相學)では三つに分け、心理學では四つになつて居る、併し今假りに此の三者を取捨按排して、矢張り硬軟二派として宗教方面へ應用して見たいと思ふ。



戰國時代の豪傑で、同じく佛門に歸依した古武士の典型として有名な二人を借り來つて右の二派を代表せしめると、前者は加藤清正、後者は熊谷直實である、時代は餘程懸隔して居るが之は悪しからず御免を願つて置く、清正公の氣質を證明すべく清正記の中より左

の一文を引用する……

大身小身によらず侍共可覺悟條々

一、奉公之道油断すべからず、朝寅の刻(今の四時)起き候て兵法をつかひ、飯を食ひ弓を射、鐵砲を打ち馬を可乗候、武士の嗜よき者には別而加増を可遣候事

一、慰みに可出と存候は、鷹野鹿狩相撲、斯様の儀にて可遊山事

一、衣類の事木綿紬の間たるべし、衣類に金銀を費し手前不成旨申者可爲曲言候、不斷身上相應に武器を嗜み人を可扶持、軍用之時者金銀可遣候事

一、平生朋輩つき合、客一人亭主一人の外嗜し申間敷候、食は黒飯たるべし、但し武藝執行の時是多人数可出合事

一、軍禮法、侍の可存知事、不入事に美麗を好む者可爲曲言事

一、亂舞方一圓停止たり、太刀を執れば人を切らんと思ふ、然る上は、萬事は一心の置き所より生ず

のである、本妙寺文書の中に……

拙者軍功は、大日本國は申すに不及、異國にても手に立つものは候はず、蔚山兵糧に盡きても諸卒に臆病者なし、是れ偏へに高祖大士を頭に戴き、朝夕南無妙法蓮華法と唱ふる故軍に勝つ、物不喰とも命に別條なし、此旨諸軍に申し觸るべし

慶長十二年四月二日

清正(判)

木村重勝殿

とある、又朝鮮陣に公の着用せられたと傳ふる南蠻鐵の兜を見るに、表には七字の髻題目を金象嵌となし、日月九曜が其上を繞り、左右に不動、愛染の梵字を刻み、内面には公の自筆で黒漆の色鮮かに銘が認めてある……

世法即佛法、爲君父捨身、則釋迦多寶十方諸佛可必護送、寂光實利也勿恐勿退矣

戊戌冬日(蔚山籠城?)判

此銘こそ公の一代を貫いて居る大主義であり大信念である、此兜を頭に戴いて陣頭に立つ、白刃も踏むべく

る者にて候間、武藝の外亂舞種古の輩可加切腹事

一、學文の事可入精、兵書を讀み忠孝の心懸專用たるべし、詩聯句歌をよむ事停止たり、心にきや奢風流なる手弱き事を存じ候へば、如何にも女の様に成るものにて候、武士の家に生れてよりは太刀刀を取て死する道本意なり、常に武士道吟味せざれば、潔よき死はしにくきものにて候間、能々心を武に刻む事肝要に候事

右の條々晝夜可相守、若此箇條難勤と存する輩有之に於ては暇を可申、速かに吟味を遂げ、男道不成者の驗をつけ可追放事不可有疑、仍而如件

加藤主計頭清正(判)

如何にも手堅くして抜目なく勇氣凛々として冒しがたき風半が言々句々の裡に仄みえて、高潔なる古武士の性格掌に取る如しである、此の如き性格が信仰の方面に於て日蓮主義に立ち向つたのは自然の傾向で、左の古文書を一讀せん者は實に血沸き肉躍るの感に堪えぬ

矢石も冒すべしで、公の七尺の長軀を鏡ふて居たのは實に此金剛不壞の信的甲冑であつた、法華經に所謂火不能燒水不能漂威猛大勢力、獅子奮迅之力とは公の如き氣質に日蓮主義といふ硬派の活信念の融合した結果として至然に迸發するので、公の武勇は通常一片の武勇で以て律する譯には行かぬ、深く且つ遠く公の宗教的信念修養の源泉にまで溯らねばならぬのである。

次に軟心派代表者の選に當つた熊谷次郎直實の性格を見なければならぬが、差常り直實の手になつた書きものも無いので、不取敢手許にあつた源平盛衰記の卷第三十八、一ノ谷陣の一節を抄出して間接的に(著者の筆を透して)直實其人の爲人一斑を推測すること、した、材料の薄弱な點は豫じめ御承知を願ひたい。

熊谷次郎直實は敦盛の頭をば取ぬれども、嬉しき事をば忘れて只悲しみの涙を流し、冑の袖を沾しにけり、情々事の有様を案するに、愚なる禽獸鳥類までも子を思ふ道は志深し、炎の中に身を亡ぼし、矢先に當つて命を失ふ事も子を思ふ情に在り、人倫いか

でか構まざらむ、弓矢取る身として何やらん、子孫の後を思ひつゝ、他人の命を奪ふらし、蜻蛉の有るか無きかの身を以て何思ふべき世の末を、是程に若く厳くしき上臈を失ひ歎き給ふらん父母の心の中こそいとおしけれ、縦ひ勳功の賞には預からずとも此首遺物返し送り今一たび替れる姿をも見せたてましらばやと思ひければ、實檢にも合せ懸頸にもしたりけれども、大將軍に申し請て、馬鞍、胄甲、弓矢、漢竹の笛、一つも取落さず一紙の消息狀に相具して、敦盛の首をば父修理太夫へを送りける、其狀の末尾に云く、恨哉此君與直實奉結縁於惡世、悲哉宿運久萌、至今成怨酬之害、雖然、此通縁者、爭互戴生死之糺、不成一蓮之實哉、然則偏卜閑居之地形懇可奉祈御菩提云云

之は直實に代つて其心事を語つたものである、戰國混亂時代の世態人情が概して悲觀的に傾くのは自然の勢であり、又此の如き境遇に臨んで無常觀に打たれぬ者は殆んど有るまいと思ふ、而も直實と同じ様に平家没

あつた、稍ありて直實法印に申す様、我れ武門に生れ幼少より干戈を取り、申胄を身に纏ひ、源平の戦に多くの人を殺害し、軍陣を破り首を取る事其數を知らず思ふに並々の事にては成佛の程覺束なし、法印願くは我が腹をも裂き腸をも斷ち手足を切りてなりとも、我が助かるべき道あらば示させ給へと願つた、法印は涙を流して實に斯る武士の菩提心を難有けれど、懇ろに生死無常の理を語り、猶安心治定の一段に至りては法然聖人に參るべしとあつたので、直ちに吉水の禪室に馳せ參じた所が、法然聖人に左右なく會見せられて偕は和殿が聞き及べる熊谷殿にて候かや、かように健かなる菩提心を發し給ふこと、恐くは凡慮の所爲にあらず、皆これ如來矜哀の然らしむる處なり、必ず疎かに思ひ給ふな、偏へに大悲の方便を喜び、罪障の輕重をさらはず、唯南無阿彌陀佛々々々々と唱ふる外に別の仔細候はずと、聖人手近く教へ給ひしかば熊谷大聲あげ、足づかりして泣き叫んだ、聖人は何故に斯く泣くぞと問ひ給へば、熊谷は尙も涙の止まらず、

落の慘劇を目撃した源家の諸勇士が、悉く頭を圍めて佛門に隠れなかつた所を見ると、彼直實特有の個性或は氣質が餘程一般とは變つて居り、従つて斯の如き場合に斯の如き措置に出ると言ふ事が、彼に取つて唯一最善の方法で、言はゞ最も彼の氣質に合つたのである或は直ちに彼の氣質の投影であると言つてもよい。

斯て直實は建久四年吉水へ入室の途次、相州箱根走湯山に止宿して専光坊より淨土の法門を聽き、其夜又京都より下向して同宿せる妙真尼より、念佛往生の教を受くべき善智識は、京都吉水の法然聖人、安居院の聖覺法師等なる由を傳へ聽き、彼は京都へ着くと第一に聖覺法師を尋ねて、拙者は坂東より登りし入道にて法門を習ひに參上せりと申し入れ、何思ひしや彼は懐中より短刀を出して頻りに式臺の石で磨ぎ始めた、寺中の僧共大に驚き恐れて眼を放さず、中にも能く知れる者ありて、彼こそ武藏の國の住人、熊谷次郎直實とて源平の間に隠れなき剛勇の人なり、法師不意に對面ましゝて不覺の耻辱を取り給ふなど忠告する者も

されば、頭をも碎き、足手をも切り、命をも捨て、こそ後生助からんと思ひしに、唯念佛だに申せば往生するぞと、安を御示しを蒙りし故、餘りの嬉しさに用意に携へ持ちたる懐劍も何かはせんと嬉し涙にくれ申候と答へた、法然聖人の高弟法方坊蓮生とは即ち此人の事である……

軟心派的氣質の熊谷が注文通りの軟派的宗教に廻り合せて如何ばかり嬉しかつたか、大聲揚げ足づかりして泣き叫んだとは、尤も有り相な事で、彼の性格は眼前に見る様である。

元來宗教には佛教と言はず耶蘇教と云はず、一宗一派各其の宗旨氣質なるものが在つて、主として教祖なり開祖なりの氣質性格から進しり出た特色を以て彩色されて居る、清正公の内兜の銘、乃至之に肉と皮とを着けて事實の上に活躍させた公一代の行動は、明かに其絶對の歸依を捧げて居つた日蓮氣質の體現と見て差支はない、對治抄の……

「若し深く世法を知らば即ち是れ佛法なり、お宮仕を

法華經と思召せ、一切世間治生産業皆順正法と經には説かれて候……

とか、如説修行抄の……

如何に剛敵重なるともゆめ／＼退く心なかれ、恐るゝ心なかれ、假ひ頭をば鋸もて引き切り、足には錐を打ち錐を以て揉とも命の通はん程は南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死せよ、然らば釋迦多寶十方の諸佛は手を執り肩に懸けて我等を守護して儘かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり、あら嬉しや／＼……

とか一々擧げ竭すことは出来ないが、如何ばかり公の氣質が日蓮聖人の御性格に契合し、更に日蓮主義の信仰の色を増すと共に遺憾なく硬派的特色を發揮するに至つたかと言ふ事は推量するに餘りある事と思ふ。

硬軟兩派の氣質の異點、並に之を基礎として築き成される人々の性格の相異は、片言隻句の末にも明かに看取せられるので、例へば歎異抄の……

『たとひ法然上人にすかされ參らせて、念佛して地獄に墮たりとも更に後悔すべからず候、其故は、自餘

の行をば屬みて佛に成るべかりける身が、念佛を申して地獄にて落ちて候はゞこそ、すかされ奉りてと云ふ後悔に候はり、何れの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみ家ぞかし……

之は有名な文章で、軟派的宗教の特質は争ふべからざる所である、尙二三の對照を試むれば未燈抄の……
『かまへて學匠沙汰せさせ給ひ候はで往生を遂げさせ給ひ候べし、故法然上人は、淨土宗の人は愚人になりて往生すと候ひしことを儘かに承り候』とあるに對して……

『智者に我義破られずば用ゐるじとなり』と言ひ、
『親鸞は父母孝養の爲めとて一遍にても念佛申したること未だ候はず』に對して窪尼御前御返事には……
『一切の善根の中には孝養父母第一にて候なれば、況して法華經の行者にて御座します、黄金の器に淨き水を入れたるが如く、少しも漏るべからず候、芽出度／＼』

とあり、開目抄には……

『父母の家を出で、出家の身となるは必ず父母を教はんがためなり』とある、其他……
『親鸞は弟子一人も持たず候、其故は我が計らひにて人に念佛を申させ候はゞこそ弟子にても候はり、偏へに彌陀の御もよふしに預りて念佛申し候人を我弟子と申すこと、極めたる荒涼の事なり』に應じて撰時抄に……

『去れば我弟子等試みに法華經の如く身命を措かず修行して此たび佛法を心みよ』とか『日蓮が弟子檀那別の才覺無益なり』とか『各々我弟子と名乗らん人は一人も臆し思はる可らず』とか、口を開けば直ちに我弟子々々々と連呼せられて居る、最後に……

『假令諸門擧りて念佛は甲斐なき人の爲なり、其宗淺し卑しと云ふとも、更に争はずして、吾等が如く下根の凡夫一文不通の者の信すれば助かる由承はりて信し候へば、更に上根の人の爲には卑しくとも、吾等が爲には最上の法にて在ます、たとひ白餘の教法に勝れたりとも自らが爲には器量及ばざれば勤めが

たし、吾も人も生死を離れん事こそ諸佛の御本意にてお在ませば、御妨げあるべからずとて、にくひ氣せずば、誰の人かありて仇をすべきや、且は諍論の所には諸の煩惱起る、智者遠離すべき由の證文候にこそ』といふ、所謂無抵抗主義、小成に安んずる諦め主義に對して、振舞抄の……

『法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一闍浮提に廣まらせ給ふべき瑞相に日蓮魁けしたり、若黨共二陣三陣つゞきて迦葉阿難にも勝ぐれ、天臺傳教にも越えよかし、僅かの小島の主等が脅さんを恐ては、閻魔王の責をば如何んかすべし』とある。

其宗特別の解釋法も無論有るには違ひないが、唯一應文上の意見を常識的に解しても、兩派氣合の相違は分明である、尙一層手近いのには人々の名前で、名は實の賓と言ふから、大抵名前を聞けば其實物の内容の何たる位は直ぐに知られる、淨土門の先覺者唐の善導大師は自ら稱して『我等愚痴の身』と言ひ、其法系を繼い

だ法然上人が「愚痴の法然坊」と合従を打ち、其又高弟たる親鸞上人は口癖の様に「愚禿親鸞」と名乗つて居られる、之に比べると房州清澄寺で髪を剃つた一青年僧蓮長法師は、自から日蓮と命名し、明かなること日に如かんや、清きこと蓮に如かんや(中略)日蓮と名乗ること自解佛乘とも謂ふべきかと喝破して居られる。以て其性格に天地雲泥の差のあるを見るべしである。色々比較して行けば際限もないが、此邊で結論に入らうと思ふ、前にも一寸言ふた通り何宗にも其宗旨氣質と言ふものが有るが、之は其宗旨を開いた祖師の人格、極言すれば其氣質が根底となつて之に外界世界の事情が其宗旨の發達上に影響して、益々其特質を著明ならしめたのである、故に其宗祖の人格的感化は知らず識らずの裡に其門徒信者の性格の上に影響を及ぼし文學美術は固より日常の起居動作言語の端にさへ各其宗旨氣質を露す様になるのである。

次に各人の氣質には先天的の部分と後天的の部分とがあり、従つて一面天賦の稟性と云ふものは動かすこ

に存するのである、併し修養なら何でも御座れ、宗教なら何れでも結構と言ふ譯には行かぬ、既に人々の氣質に種別があるのであるから能く各自の稟性を鑑みて慎重に宗教の選擇をせねばならぬ、若し飽く迄も自己標準で何でも自分の氣に合つたものを採るとならば別段六ヶ敷事もないが、凡そ人は社會的存在物であるから、單に個性のまゝに任せることは出来ない、否個性の發達完成は必ずや社會を俟つて成就せらるべきもので、一刻も社會を離れて行動する譯には行かぬ、即ち社會境遇に充分なる順應を爲しつゝ、各自の特性特能を發揮せねばならぬ。

我國は世界の一等國に列したと言はれ、我等同胞に亦世界の大國民と稱せられることとなつたではないか併し之は單に言はれ稱せられて居るのみで、言はゞ空名虚名で、未だ之に割入實力實質が完備した譯ではない、残念ながら正直な告白である、して見ると我等が此後執るべき方針、國運進展の前途も自から明瞭になり來る譯であつて、結構吾々お互斯る時代に處して

との出来ない所謂生れ付きと稱するものであるが、之と同時に他面には教育修養の如何に依つて改善し發展せしめることの出来るものである、それ故に若し天然自然に放任して置けば、各自分々の稟けて來た生得の氣質に適合しようなものを好み其方にのみ延びて行くので能く言ふ「類を以て集る——蛇の道は蛇——馬は馬——臭いものには蠅がたかる」と云ふ様に、譯め主義消極主義未來主義の淨土門には、之に適した性質の人々が集まり、邁進主義積極主義現實主義の日蓮上人の門下には、又之に適した性質の人々が歸向する譯で、吾々は生れながらにして既に軟派硬派と旗幟が分明になつて居るので、今更何とも詮方がない様であるが、之と同時に例の人爲的に自由に變改の出来る部分があるから、或は生得の稟質とは全く正反對の方向にも指導して行くことも出来ない事はない、諺にも「惡にも強ければ善にも強い」で心機一轉全く別人の様に生れ變つた人は、道德上にも將た宗教上にも其例は擧げ切れぬ、廣く言へば修養特に宗教の必要な點は此處

靈的大日本帝國の建設に一分の寄與貢獻を爲すことの出来るのは此上もない愉快且つ光榮の至りで、吾等は此の如き廣大深遠なる國家的使命を遂行し得る様に吾等の心身を修養し訓練しなければならぬ、殊に人間活動の根底として無限の活力を供給する所の大信念は、如何なる宗教より得らるべきかを慎重に研究し、自己天賦の稟質を内省しつゝ、常恒不斷に斯る信仰に向つて適性直進せねばならぬ、日蓮主義の「教、機、時、國、序」と云ふ五綱の大判は獨り宗教建立の要件として必要であつたばかりでなく、お互が此の活ける大切な時代に處して、國民とし將た個人として遺憾なく其本分を盡すに就て如何なる信仰を選び、如何なる宗教を探るべきかを決するにも活用すべき大綱格ではあるまいか、就中教、機の機を或る意味に於て吾等の所謂氣質の事と見ると、一層面白味の増すことゝ信するのである。

桃山奉送の記

文學博士 姊崎 正 治

明治天皇、登遊おらせられしよりはや四旬の餘を過ぎて、九月十四日は、桃山の新陵に御遺骸を斂葬し奉るの日と定まりぬ、東京在勤の官吏中より若干の總代を立て、之を送り奉ることとなり、余は文部省部内奏任官の總代としてその員に加はるの光榮を得ぬ、六千萬臣民の中、親ら大葬儀に列し得るは僅に數千、その中にて又最後の御斂葬まで奉送し得るは數十のみ。

今この光榮に浴し得しは悲みの中の喜び、諒闇の中の殊思なり。

回顧すれば三十餘年の昔、明治十四年十月三日といふに、桂宮淑子内親王殿下薨去あり、翌四日事へまつりし我が亡き父は、御墓地檢分の任を帯びて泉涌寺に赴きしが、歸途病を得て一夜の病患に亡き人の數に入りぬ、幼心の吾れ父は宮様の御供したりとの感深く、御墓に參拜する毎に父の靈は御墓の邊を守りて彷徨す

上には奉送の人々影暗し。

そのかみのしのぼるるかな今日はしも

はてのいでまし迎へまつりて

大内の松の木立も影くらく

歸り來まさぬ御幸かなしも

時は八時に近づきて橋上松明の光り暗の中に閃き、しめやかに歩む人の影幻に似たり、續いて幾旋の旗動き、弓矛に次で櫛見え、道樂の哀れの音さこえ始めぬ、此時號砲は出御を報じ、四方の梵鐘遠く夕暮の空に響き亘りて、輜車の轆る音泣くが如く咽ぶが如く、橋上御車の姿此の世の物とも覺えず、萬人呼吸をこらし頭を垂れ、寂寞の天地凄凉森嚴の氣充つ。

かくて萬民の奉送をうけさせられ、靈輜は青山の祭場殿に着御、壯嚴の祭式済ませられて後、我等は天幕の中に集合して靈柩發車の時を待ちぬ、祭場の輦合人散じて電燈獨り明かなるも、夜は愈よ更け行き、秋風黒帳を吹きて寒し、靈柩を送りまつりて後、我等が第二供奉列車は着きぬ、乗車して靜坐瞑目すれば、此よ

らんと想ひて、御墓前に涙を落とすこと幾度か、此よりして陵墓に對する崇敬の情は身に切に、稍長しては山城國中の陵墓を巡拜せしこともありき、我れにして一生の晩年世外の人となるを得ば、西行の如く身を雲水に托して行脚せんか、然らずば何れかの陵守となりて身を終らん、是れ今も吾が願ひなり、桃山の新陵斂葬の日、靈柩を送りまつりて陵前に拜跪せんとの熱望抑へ難く、奉送者の候補に數へられんことを願ひしが、先帝の御大靈徵臣の志を嘉納あらせられしか、亡父の加被遺子の志を成ししか、この願ひ許されて一夜を陵傍に明かし、新陵最初の禮拜に加はるを得ぬ、此の喜び胸に溢れて筆心を盡さるも、茲に奉送の記に感想を書き綴りぬ。

十二日は殯殿白帳垂れこめし中に靈柩を拜し、宮中の別れ告げまつりぬ、十三日薄暮二重橋外に立ちて輜車の出御を待つ、織月城頭の松樹にかゝり、暗は御溝を蔽ひ、篝火城壁のあなたに隠見す、五旬の前、幾萬の群衆が御腦平臺を祈りし跡夢と消えて、御門前の砂り遠路奉送の責任、思ひ長く先帝御在世の追憶情今更に切なり、かくて新宿より驛々には奉送の人堵をなし沿路暗中に燈光星の如し、靈柩の過ぎまし、後にすら人々は歸るに忍びず、我等の列車をもかくは見送るなりけり。

夜をこめて今日の御幸を送りまつる

青びとぐさぞ國のみたから

時は三時となり四時を過ぎ車中靜かなり、我れは徹宵開經並に法華經を續む。

夜もすがら御法讀みつゝ我が君の

彼の世の御幸送りまゐらす

藤澤あたりにて東の空白み始む、警噓品の今日乃知眞是佛子の句に至りて。

今日ぞ知る佛の御子と我れも亦

心さやかに白むわけぼの

今此三界の隅に至りて。

民草を子と育てます大君は

いのちの御親又道の父

まがつびのさばへなす世に大君の
守りぞ民のためのみなりける

國府津にて夜は全く明け、足柄山中にて日始めて雲
間に出で、裾野より仰々富士の姿神々し

今日もまた日は出でしかど我が君は

此の世にしてはまたも見まさす

大君は神去りまじしかはあれど

國てらす日は君の御すがた

途中所々の驛々は云ふまでもなく、野といはず田と
いはず人の立ち得る所には、老若男女群をなして奉迎
奉送し、團體も個人も各々思ひ思ひに誠を盡して敬意
を表す、彼等は供奉の一部と思へばにや我等の列車に
向つても敬禮し、或は合掌して禮拜するもあり、嗚呼
我等は官吏の總代として奉送の榮に與るも、途上かく
までに人々の敬意を受くる身は、六千萬臣民の誠意を
代表する心して、この光榮ある任務を果さるべから
ず。

御車の過ぎにし跡も野に山に

心づくしの民充ち満ちぬ

老を扶け兒等を率ゐて御車を

送るや誠こゝろ一つに

かくまでに深き誠の民草は

大御心の生みまし、子等

山の奥島のはてまで變らぬは

民の心の誠なりけり

野には禾穀熟して穗末風に靡き、畔に立てる老若男

女の田の面に列をなす

千五百秋榮ゆるを田の穂と共に

しげりあひけり君の民草

參河尾張に入りては奉送の人一層多く、合掌禮拜の

人益す多し。

行きゆきて盡させぬ民の真心を

見ては涙の外なかりけり

畔に立ち砂に伏してもをろがむは

現つ御神の御子なればこそ

「我が國は神の國」との御教へは

曾てこゝなる小童よ、汝が築きにし城の跡、

すめ大君の御陵と、なる日の今日をきゝて喜べ

かくて路は江州に入りて微雨至り、湖面おぼろにか

すむ、日枝の峰には雲かゝれり、日枝の半腹に雲ある

時京都は必ず雨、今や靈樞故郷に入ります頃、京洛の

山河憂の雨を帯びて大君の御遺骸を迎へまつるか。

憂ある故き都の山河は

涙の雨に極むかふる

嗚呼先帝、世界を吞吐するの大氣宇を以て王政維れ

新に宇内を統御ましまし、武威八紘を蔽ひ文徳四海に

洽く、而かも亦御身の生まれましまし、故郷、且つは皇考

の御陵ある山河に心を通はしまし、大御心のやさしさ

秋草をみそなはしては故郷禁苑の草花、園守のみや眺

むらんと思はせ給ひ、夜半の御夢にたちちねを慕はせ

給ひしも、恐らくは京都内裏の何れかの邊りに父帝を

見まししならん、帝王に故郷なく四海を家とし給ふも

面かも亦やさしく細かなる御心には、御幼時の思ひ出

に笑みを合ませ、故郷を思ひ給ひては人知れぬ思ひに

名古屋も過ぎて暫く田の面に立てる人々の手にせる
旗にてその中村なるを知る伏見城のありし丘の上の新
陵に向ふ途上、豊公の故郷を過ぎては古今俯仰の感な
きを得ず。

民の心に活きて榮ゆく

いかにいへどいかに思へど盡させぬは

君にささぐる民のまごころ

しきしまの大和心のゆかしさは

君思ふ心に現はれにけり

御車を送りて作る人垣は

百里千里盡くる際なし

熱田神宮は森の木立を望みて過ぐ

哀みの極みを歌ふ此日また

あつたの宮居をろがみて過ぐ

御劍は醜の民草なきつくし

明く治まる御代開きけり

草なきの神御劍の御靈こそ

わが大君と生まれまされけれ

名古屋も過ぎて暫く田の面に立てる人々の手にせる

旗にてその中村なるを知る伏見城のありし丘の上の新

陵に向ふ途上、豊公の故郷を過ぎては古今俯仰の感な

きを得ず。

沈ませ給ひしことも多かるべし、そのなつかしき京都の地にも、十數年前暫く静かに秋を送りましし外、大演習行幸の途にすら立ち寄りもし給はず、常に常に東京なる宮城に政務をみそなはし、而して今や龍駕永へに歸らざるべく、京都には僅かに三分の停車を名残として新陵に入らせ給ふ、微臣余の如き、夏毎には故郷に遊びてその山河を跋涉し感懷を遣り得るに、大君は曾て此等の閑遊を事とし給はず、人は女々しと云は云へ、我れは御遺骸が一夜も故郷の内裏に入らせられざるを思ひて、胸に溢るゝ思ひを禁する能はず。

月の輪の山邊はるかに望み見て

過ぐる御車など心なき

泉山月の輪出で、皇御親

御靈は御子を迎へますらん

たらちねを夢に見ましし大御靈

今月の輪に向ひますけん

すめろぎがうなるの年を過ごさせし

古き宮居の君待ちかねつ

淨めの砂水に濡ひて、篝火は雨氣濛々の中に閃く、靈柩は既に葱花輦に移りまして黒幕の中にはの見ゆ、暫し待つ間に上村大將より乃木大將の訃を聞きて驚愕痛惜感慨限りなし、嗚呼我れ復何をか云はん、西の都には猪熊夏樹翁が殆ど殉死にも似て世を去りしあり、今亦彼の世の御伴にこの好武夫を加ふ、事は異なるも我が亡き父の事更に新に胸に湧く、かくて六時半夕の空漸く暗く、微雨蕭々の中に靈柩は新陵に向つて、まだらかなる丘路を上ります、人の歩み笙の音色、あたり光景何れも何れも只しめやか只あはれ。

御輿進む歩みも空もしめやかに

笙の音はのに丘上りゆく

陵前に輦を安んじ奉り、宮の方々の御退出に次で、我等も陵前を辭して一夜をあかさん寢舎に入る、雨愈加はる、陵前の一や感懐無量。

我が君の大御骸をさむる夜半の雨

よろづの民の涙とぞふる

けふよりは此の丘の邊のさきりぎりす

祐の井のあたりに咲ける草花は

今日秋雨にぬれそぼつらむ

東西宮居を周る山々は

今日の御幸を如何に見るらん

春を迎ふる大原野も、大井の川の秋の夜も

伏見の山に手向けてぞ、花を咲かせよ月も照れ

泉山を望みては、分外ながら我が父のことも惚ぼる

月の輪の御墓邊守る我が父の

靈は笑みてぞ子の來しや見ん

四方の山々、皆是れ我が曾遊の跡、今日供奉の身の

眺むる心自ら異なり。

今までも巡り拜みし四方山の

みさゝぎの數今日一つます

四方の海渡り巡りしわが身はた

いつか歸らん故郷の土

東山わがおくつきゆ朝夕に

靈は伏見にまかり侍らん

我等が桃山に着きしは薄暮、雨は愈よしめやかに、

君の御靈に手向けてぞなけ

あすよりは御陵の邊に人稀に

笙の嵐の樂やかなでん

春の朝秋の夕べに大御靈

歌よますらん此の丘の上に

皆人の御陵守る此の一夜

共に御法を説かん世もがな

來ん秋はこゝに一夜を我れ一人

薦めまつらん本つ世の法

諸共にこの夜をあかす宮人よ

聖の徳を如何にしのおや

長さ夜とつねにはいへど今日の今宵

はての御供のなごり惜しくて

秋の夜のいつしか空は白みけり

御稜威の跡をたどりをる間に

我が誠納れられにけん大御邊に

あかす一夜も君の御めぐみ

ベンチに憑りて端坐せる東郷大將を見ては、明治時

代に於ける皇國興敗の樞機たりし大戦と共に、大將が毎に御稜威を感佩せられしを想起す。

大君の御稜威あげにし壯夫の

御墓守る夜の明けんとぞする

上村大將も同じく端坐瞑目せらる、唱題もせらる、ならむか。

波の上仇を救ひしその心

すめろぎのため又法の爲

思ひは綿々糸の如く續き、感は無盡に今昔を馳せ、しめやかなる一夜もはやそら白み亘りて御陵丘上の松樹分明に見え、雨は晴れて氣爽かなり、午前九時陵前の奉告あり、日の光眩く新なる白木の鳥居朝日に輝き、神靈今やこゝに鎮まりまして神威新に加はる、昨は微雨の中に哀みの極みを奏して暗夜靈柩を送りまゐらせ今は朝暉の光りに神威を仰ぐ。

亡き御から送りまつりし夜半の雨

はれて新たに神の御あらか

此よりは幾千萬の春秋に

追慕の思ひ茲に歸趣を得たり。

國の君法の聖の世に出でて

明かしし道の二つやはある

しきしまの大和言葉の數々を

殘しましけり道のしるべに

ものゝふの五つの徳も只一つ

心のまこと貫くべかり

敷島の道の高根をわけつくし

昇りましけり雲のあなたに

神に通ふ心誠の現神

天つ宮居にかへりましけり

大君の天つ御幸の路にもと

散らすや法の花の品々

嗚呼我れ常には歌詠せず、たまたま詠み出づる我が歌亦歌にあらず、されどたい奉送の光榮に浴して感懐の發露聊かこの記を草す。

聖の光りこゝに仰がん

身は式の如く禮拜し、心には今此三界の文を誦し、惜しき別れ告げ參らせて陵前を退出せしは十時、伏見なる中野氏の家に客となりて始めて二日の禮装を解き、我責め茲に果しぬと覺えては五體解けんばかりの疲れ始めて知りぬ、新聞社の人々四五に接して後、一睡の中に八九時は過ぎぬ、九時と思ひし列車に後れ、夜十一時中野氏父子に送られて京都を發す、新御陵の彼方には光りほの貝ゆ。

大御骸しづまり居ます山の邊を

光りたよりにをろがみてすく

事はて、歸る暗夜の汽車の中

むらぎもの心思ひ千々に湧く

静岡につきしは朝の七時、車を更へて江尻に入り、三保の最勝閣に先帝報恩奉悼の法會に參す、奉送徹宵の中に法華を誦誦し、輩に對し陵に對して心に聖偈を誦せし我れ、今こゝに來りて方便壽量の要文をさゝ、散華行道の式典を仰ぎ、平安王朝の昔をしのびて渴仰

折伏餘論(三)

白碧生

十月發行の文藝宗教に関する雜誌には乃木將軍の記事と極端なき片々たる地上の道徳觀のみで高遠なる理想的大徳教に思ひ及ばず所がない凡そ道と云つても吾人の現在行爲を律するのみで永久實在の觀念が無いならば其は人間相互の約束に過ぎない事になるそれでは何等の權威がない權威の存せざる道は何の用にも立たない必ず崇高にして偉大なる權威に頼りて人生を律するを要する彼山鹿業行の中朝事實に「中土之水土卓々於萬邦一面人物精秀千八絃故神明之洋々聖治之縣縣煥乎文物結乎武徳以可比天壤也」と云ふてあるが神明聖治の文字身は是れ正しく權威ある神明の靈力の發作して地上の聖治を見るべきの意味合であつて人々個々の道徳的社會的一切の心的發現は斯かる理路を辿らねばならぬ我が日蓮主義は高き實在的偉大人格の慈愛に感孚してこの理想主義を現實に應用するもので極めて堂々たるものである世の片々の學見に在るもの來りて日蓮主義の靈聲を聽き小我の迷夢より醒あよ

鑽 仰

「日蓮主義研鑽者にして其意見を發表するもの、爲に、このたびこの欄をもよく貴稿者に在りて採否は記者の權内に屬す」

釋尊と當時の世界

法科大學生 松浦道熹

我が久遠實成の大本佛は六或の應用を以て普く形聲の益を垂れたまふ、吾人は自由に佛陀の慈悲願海に掉して大靈の光明に照され、生死の波濤を絶えて大覺の樂園に到るべき光榮を喜び、渾身の熱禱を捧げて感謝の誠意を表するもの也。

我が釋迦牟尼の印度に降誕せられ玉ひしは、我神武紀元一〇四年綏靖天皇の即位二十五年にして、周の靈王の十五年乃ち齊魯の南部を伐ち晉の平公立ちし年なり、西曆紀元前五五七年ベルシヤ帝國興りし翌年なりき、釋尊七歳の時孔子魯に生る、而して釋尊の大哉大覺の成就せさせ玉ひしは、西曆紀元前五二三年十二月

界として南北に大道を布く、誠に史上空前絶後の大偉觀にあらずや。

釋尊、妙法蓮華經卷三の藥草喻品第五授記品第六化城喻品第七を説き玉ひし時は、西曆紀元前四八三年にしてデミストクレスとアリスチデスの抗爭、アリスチデスは修羅の巷にてありき、支那には周の敬王の三十七年孔子の子孔鯉死し顔回卒し、春秋戰國の亂世にして孔子悲歎の時なりしが、獨り我帝國は太平の昭代たる懿德帝の二十八年にて全世界に日本と印度との二國が波瀾なく治まりしも亦妙ならずや、而して卷四の五百弟子受記品第八授學無學人記品第九法師品第十見寶塔品第十一を顯說せられし時は、我紀元一七九年懿德帝の二十九年、西曆四八二年にして支那にては哀公孔子に政を問ひ吳晉と黃池に會せし年代也、而して提婆達多品第十二勸持品第十三安樂行品第十四從地涌出品第十五を説かれし時は、周の敬王三十九年にして孔子魯史に因りて春秋を作り、西洋に在りては四八一年ベル

八日にして我紀元一三八年安寧天皇の二十六年也、今を距ること二千四百三十五年の太古に屬す。

釋尊大乘の妙法を説き初め玉ひしは、我懿德天皇の二十六年紀元一七六年にして、御壽七十有三に御在しまし、乃ち周の敬王の三十五年に當り齊其君を弑し、孔子時を得ずして陳より衛に歸られし時也、西洋に於ては劇作家エウピデス生れ、彼のローマの護民官ウィセリウスガアグラリアン法を發布し、メルチアデスが獄死し、ベルシヤ王クセルクセス一世が即位の翌年にして基督降誕以前四百八十五年の昔にてありき、孔子其翌年魯に反りて書を叙し禮を記し封を削り樂を正し、易の彖象說卦文言を序せられし時は、大聖釋尊は印度王舍城の耆闍崛山の中に住しなして、十方の諸佛諸菩薩諸天大衆に圍繞供養せられつ、法華經譬喻品第三信解品第四を説き給ひし時なりき、彼の西曆四八四年にして史家ヘロドトス生る、此時孔子は曰く「此土に賢聖なし西方に佛圖と云ふ人あり此聖人なり」と、嗚呼孔聖にして即ち聖人を知る、ヒマラヤ山を境

シヤ對向の爲にデミストクレスの主唱に基きコリント會議を開きたるの時なりし也。

宇宙の大真理を光顯し佛陀の久遠顯本を示したる大法典たる如來壽量品第十六及び分別功德品第十七隨喜功德品第十八法師功德品第十九を顯說せられし時は、我紀元一八一一年懿德天皇三十一年に當る、西洋にて四八〇年クセルクセスガギリシヤを征討しヘレスポントを渡りテルモビレの戰を爲し、スバルタ王レオハダス陣歿しアルテルミシオンの海戰やアデンの兵燹やナラミスの大海戰や、次でベルシヤや王再舉アラテューの大戦ミカレの海戰などありし時なり、亦常不輕菩薩品第二十如來神力品第二十一囑累品第二十二藥王菩薩本事品第二十三妙音菩薩品第二十四說法の時は、我皇紀一八二二年にして、西曆四七九年に當りアデンガギリシヤの覇權を掌握し西歐漸く太平の曙光を呈したる時なり、彼の支那に在りては周の敬王四十一年夏四月孔子年七十有三にして魯に卒す、次に觀世音菩薩普門品第二十五陀羅尼品第二十六妙莊嚴王本事品第二十七普賢

菩薩勸發品第二十八を説き終り玉ひ、人類世界に降誕の大本懐を成滿せられたる時は、皇紀一八三年也。

かくて釋尊は大涅槃經を説き終り玉ひて二月十五日御壽八十一にましまし悲滅現滅の御相を示し玉ふ、この大正元年を距ること正に二千三百八十九年の昔也、我懿徳天皇は其年の九月八日聖壽七十有八にて崩じ給ひぬ。

吾等度で之を思ふに、釋尊の入滅は常人の命壽盡きて白雲の間に消へ去り玉ふたる如きものにあらず、人類をして大人格を渴仰せしめ、大教法に憑るべきを教へたるものにして、時間と空間とを貫きて益物設化せらるゝものなり、法華經は如何なる時代に在りても完成せる大真理にして救済の要道たり、萬世不朽の真理と偉大なる佛陀の大人格とは、依て以て眞に人類を救ふの道たる也、觀よや宇宙觀にあれ人身觀にあれ佛陀觀にあれ、完全充足の大教義にして而して實在の大人格を得る所、誰れか拜跪尊仰を捧げざるものやある、然れども佛陀は涅槃經に説いて云く、「末法には正法の

衆生を度せんが爲に方便して涅槃を現す而も實には滅度せず常に此に住して法を説く、あゝ常住此說法の文字是れ吾人の最大注意を拂ふべき點にして此土有縁の佛陀は彌陀や大日や藥師にあらざること明白の理なりと共に、皆是れ分身散影の地位なるが故に來りて久遠の本佛に奉事すべきもの也、彼の區々屑々たる基督の奇蹟の如き、豈に大慧日に照さるゝ果敢なき霜露のそれにあらずや。

古聖云く「法貴ければ人貴し」と、眞に然り、佛陀は法華經に説て云く、「若し此經典を受持せん者を見れば當に起て遠く迎ふべし當に佛を敬ふが如くすべし」と、大法尊重の態度を教ゆるに而かく周到を極む、蓋し受持經典とは形式的に經典崇拜の徒を指したるものにあらずして活ける法華經の大精神を心讀し色讀する行者を云ふは勿論の儀也、この經典は一切人類の菩提向上の大軌道を教示したる大正法にして諸佛出生の門也、彼の和泉式部歌ふて云く、「二つなく三つなき法とき、つれば五つの障りあら」とを思ふ、眞に然り、女性の

者は爪上の土謗法の者は十方の土」なりと云ひ、又法滅盡經に於て、「謗法の者は恒河沙正法の者は一二の小石世間の罪に依て惡道に墮る者は爪上の土佛法に依て惡道に墮る者は十方の土の如し」と説き、この一乘の大鳳船に乗らずして風波に堪へざる小船に乗らんとする者多きを徹見して深刻なる嚴誡を與へられたり、之に依て通觀し來れば嚴誡として昔より今に至るまで斯かる謗法の輩多きを悲まざるばあらず、聽けよ、如來は云く、讀是經者常無憂惱又無病痛顔色鮮白不生貧窮卑賤醜陋衆生樂見如慕賢聖天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害若人惡罵口則閉塞遊行無畏如師子王智慧光明如日之照若於夢中但見妙事、斯の如く大靈徳の發現として現證的に強き力ある功徳を存す、而かも之れ久遠以來幾多の先哲に依りて實證せられたる大法也、若し夫れこの大寶藏に入りて至心の信仰を捧げなば必ず用道の實を觀るべきは疑はざる所にして、釋尊は常に此宇宙に遊化して人類救済の活動を爲し玉ふ、即ち如來壽量品の偈に云く、

成佛を實證したるは法華經にして他經には其趣を存せず、彼の昔公は法華を信奉し且つ詠じて云く「開敷妙法蓮誓弘無誑語福享不唐捐」と、今哉法華經主義は時代の缺陷を補足して適切なる指導を與ふるの大教義なるを認められ、天下を舉げて法王の家人たるを光榮とするの傾向を來たせり、吾人は更に大正元年の新たなるとともに、日蓮上人鐵仰者が二陣三陣と打つゝひで大法の宣傳に努力せらるべきを信じ、わが同胞が至誠熱烈の渴仰を以て佛陀の靈水を汲まんことを切望して已まざる者也。

日蓮上人云く

されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都たるべし我等が弟子檀那ならん人は一步を行かずして天竺の靈鷲山を見本有の寂光土へ晝夜に往復し給はん事うれしとも申す計り無し

活動史

▲日蓮主義は舊式の堂宇に於て老若老盛を對向としてのみ語るべきものでない現代の競争場裡に活躍して意義ある人生をおくらしむるに活力を賦與するものであつて即ち精神の根柢たり基礎たるものである風々層々たる局部的の道でない天下何人なりともこの教に遊り人格を陶冶し思想を鍛練すべきであることに物質文明の病毒に感染したる現代人は深く奮みて思想の問題に活力を求め卓越せる日蓮主義に聽いて向上を享有せねばならぬとされてにや都に於ける日蓮主義の勃興は社會の各階級を通じて讃仰の熱度が高めこの道を聽かんとするもの著しく多きを加ふるに至つた本國總裁本多大僧正は帝國大學内樹洽會に於て無量義經の批判教義を每週一回講演を爲しまた宗教大學の招聘に應じて日蓮主義の綱格を講述し或は實業團體の集會席上大人上人主張の要義を説き大に化の教光を發揮しつゝありて我大本拿の實前に拜跪するもの多くなりし事實は本に欣ぶべきことである而して本團は毎月五回の公開講演會を開いて一般の參聽者を歡迎し各講師の熱烈なる廣長舌は能く現代人の欲求に應じて満足と慰安とを與へ月を逐ふて盛況を呈するに到りつゝ居る十月十三日の講演會には法學士小西眞雄君が日蓮上人の御事業に就て精神修養の根本義を紹介し關田特命布教師は上人の卓越せる人身觀より觀き起して感應の方用を述べ一種の靈感を與

ふるものがあつた同十六日妙教婦人會の壇上には笹川特命布教師が尊敬の意を説きて人たるの行動を律し本拿と信仰との連鎖を詳述して人としての價値に及び本多大僧正は大衆日蓮主義と題して日蓮主義に對する世人の妄見を解き辯证的にあらすして包容的大教義なる所以を論明し字内の大宗教にして大徳教なりと誨へ聽衆の肺腑を衝いて信念を喚起するものがあつた次で二十日午後一時より地明會主催にて講演會を公開し小林文學士は現代女性の病弊を指摘して各種の設備があまりに淺きを一蹴し去りて日蓮上人の女性觀の一斑を述べ服從節操の修養上の訓諭に依るべしと論じ本多大僧正は道人の尊重すべき所以より説き起して東西兩洋の倫理道徳と日蓮主義とを對照し批判し來りて日蓮主義が個人主義自然主義世界主義其他片々たる思想を超越すべき大徳教なりと論結し熱烈なる萬丈の氣焔を擧げらる聽くもの何れも高邁にして實際的なる大徳教の難有さに感嘆し本團會員に加へられしと申込むもの十數名ほどあつたいかにも法益の大なりしを知るものが出来るわれ等はたゞこの道の爲に欣びに堪へない

▲觀善會 十月十一日午後一時より何會を開き山根日東師の因縁警覺法戒に亘りて日の理想と蓮の徳風に就き平易顯明なる廣長舌を振はれ人は捨惡知識親近善友の教訓に従ひ平和にして發展の生涯を送るべしと誡告せられ處世の要道を示されたので喜びのうちに散會を告げた

▲總教青年會 同月二回の講演はいくく青年の志氣を興さしめ求道の欲を充たすものがある中で中々盛んである十一月一日は中川事顯君の現代に處する青年の意氣理想を示して宗教の信念に依り修養すべしと論じ關田會長は例により國民道徳の重すべき所以及び信仰法悦の境涯を説いて從容事に當るべき力を聽衆の心田に注いで午後十時會を開きた

▲川村妙蓮寺内養徳兒童會は會を重ねることに集まりの兒童多く一日の日曜をして意味ある遊びに送らしめ平易なる訓育講話によりて宗教性の萌芽を培養するはげに有益なる會合と謂ふべけれ十月の例會は二十日午後一時より開いたが笹川會長山根日東師の御勸諭や歴史物語りは兒童の小さき胸に響き深い印象を

與へるそうして噂々として遊び悦び勇心でその家庭に歸るが兒童は無邪氣で活潑でそうしていかに可愛らしいかは其き集りて他の寺院にてもかかる設備があつて欲しい

▲恩教秋林十一月五日午後六時より淺草永住町妙經寺に關く野口日主師等の通俗的講話によりて人の履むべき道を知らしめ其徳を養ふべきを教へいと盛會なりと云ふ

▲十月二十二日午成寺に於て堂宇修築の法會を行ひ赤村日成師の信仰の要旨所談あり本多大僧正は道の尊重すべき所以日蓮主義の完備せる大徳教なる理義を叙けり同寺は從來假堂なりしも住職田井日覺師の經營により千餘圓の修築をなし其體裁を改むるに至れり

の特色を發揮して氣焔萬丈當るべくもあらず近き將來に於てわが同志の活動が教界を震動するの期あらむ

十月二十四日東の空まだ白みきらないう午前五時四十分監督者教師今成日醫師と同行して二本松行吉切符の客となつたいつも濡れる都の空氣を呼吸せる予は清き朝風に吹かれて何となく爽快にして心持がよい列車の乗組員數は男十三人女一人で樂々と腰をおろすことが出来た大宮驛へ着いた時は五人の男の客は好い心地そうに眠つて居る沿路一望の島には農夫が粒々辛苦の精糧を出して働いて居る八時小山驛に着いたが一天澄み渡りんのみである九時宇都宮で一人の下車と七名の乗車とがあつた列車が動き始めると思ふが列車内を雜巾かけて奇麗に片付けた矢板驛を少し離れると山や島の間に蘆草が點在りて居るのを見へるそれが何れも蘆草生ひ茂りて地の體を爲さない從て其地の宗教信仰の状態も思ひやられて何となく可愛相に感じられた西須野に下車した者が多いので一車僅かに八人何れも無言の儘奥州路に入りて白河も越え山又山自然界が下夫したる紅葉の彩色は地上の美麗ならめと思ひつゝ郡山もいつしか過ぎて午後二時岩倉二本松に着いた米羅徑本兩師の迎へにうけ馳車を新りて大和屋旅館の客となつた二本松は千五百餘の戸數を有して電氣や電話などの設備ありて時代文明の形式は完備して居る寺院は各宗通じて二十四ヶ寺あり

關係を懇説せられたので聽衆はおのづから合掌禮拜して云るものあるを見 けた

▲國明會 十月八日午後二時より御會式舉行と共に講演會を開催し吉永義彦師の偉大なる祖師の高徳を懇して渴仰の念を起さしめ本誌の三上記者は信心の義解を説いて世人の誤解を正し老若悉く信心の行門に入るべしと教へ聽衆少かりしも一堂何となく生氣に充てる思ひがあつた

▲觀善會 十月十一日午後一時より何會を開き山根日東師の因縁警覺法戒に亘りて日の理想と蓮の徳風に就き平易顯明なる廣長舌を振はれ人は捨惡知識親近善友の教訓に従ひ平和にして發展の生涯を送るべしと誡告せられ處世の要道を示されたので喜びのうちに散會を告げた

▲總教青年會 同月二回の講演はいくく青年の志氣を興さしめ求道の欲を充たすものがある中で中々盛んである十一月一日は中川事顯君の現代に處する青年の意氣理想を示して宗教の信念に依り修養すべしと論じ關田會長は例により國民道徳の重すべき所以及び信仰法悦の境涯を説いて從容事に當るべき力を聽衆の心田に注いで午後十時會を開きた

▲川村妙蓮寺内養徳兒童會は會を重ねることに集まりの兒童多く一日の日曜をして意味ある遊びに送らしめ平易なる訓育講話によりて宗教性の萌芽を培養するはげに有益なる會合と謂ふべけれ十月の例會は二十日午後一時より開いたが笹川會長山根日東師の御勸諭や歴史物語りは兒童の小さき胸に響き深い印象を

聖祖門下雜誌記者會

わが同志が團浮統一の下に結合し二陣三陣の若黨共として隨力演説の意氣奮闘く異體同心の實踐並に興り本會の威風がて理想の實現をいたさむ聖訓の「努々邁く勿れ」との大字はわれ等の脊々腰背し敢て恃らんことを懼るゝ所さらに渾身の活氣をいだして勇猛進進せんのみわが會が月例一回の講演會は一度も休會なく續行し十月二十六日午後一時より第六回講演會を統一團に關く統一通信社工廠山由妙教社逸見通漢統一通信高嶺天城日宗新報社清水師一諸氏は熱烈人の肺腑を衝く底の法鼓を鳴らし聽衆の琴線に大なる響きを與へ喝采聲裡に散會を告ぐ午後五時より晚餐會を催ふし胸襟を披いて天葉の恢弘業を語り法螺會

北東北教誌

十月二十四日東の空まだ白みきらないう午前五時四十分監督者教師今成日醫師と同行して二本松行吉切符の客となつたいつも濡れる都の空氣を呼吸せる予は清き朝風に吹かれて何となく爽快にして心持がよい列車の乗組員數は男十三人女一人で樂々と腰をおろすことが出来た大宮驛へ着いた時は五人の男の客は好い心地そうに眠つて居る沿路一望の島には農夫が粒々辛苦の精糧を出して働いて居る八時小山驛に着いたが一天澄み渡りんのみである九時宇都宮で一人の下車と七名の乗車とがあつた列車が動き始めると思ふが列車内を雜巾かけて奇麗に片付けた矢板驛を少し離れると山や島の間に蘆草が點在りて居るのを見へるそれが何れも蘆草生ひ茂りて地の體を爲さない從て其地の宗教信仰の状態も思ひやられて何となく可愛相に感じられた西須野に下車した者が多いので一車僅かに八人何れも無言の儘奥州路に入りて白河も越え山又山自然界が下夫したる紅葉の彩色は地上の美麗ならめと思ひつゝ郡山もいつしか過ぎて午後二時岩倉二本松に着いた米羅徑本兩師の迎へにうけ馳車を新りて大和屋旅館の客となつた二本松は千五百餘の戸數を有して電氣や電話などの設備ありて時代文明の形式は完備して居る寺院は各宗通じて二十四ヶ寺あり

るが精神文明を進める事に就ては何等の設備もないと云ふ事を聞いた何れ地方でも物質上の設備には公道體として力を盡して居るが精神的附帯には注意を拂つて居らない之は町村自治完成の上から見ても大なる缺陷と云はればならぬ何となく夫をせねばなるまい二十四日午後七時華蓮寺に於て大講義會を開いた佛祖三寶尊に法味を捧げたる後予は歴史上の偉人日蓮の大人格を紹介して現代人修養上の好模範となるの理義に就て二時間と二十分論議を了した今成日醫師は宗教信仰の歡悅的増進を説いて活動の根本基礎を講られた聽衆は男女半半ばして約八十名中に他宗の正眼僧侶が四名も見へたこの長時間に亘れる講演がさほどに倦念の色の見えなかつたのは何よりも悦ばしい之は地方人が求道の熱火が燃へて居るからであらう

二十五日午後七時同町本久寺に講演を開催したが雨激し降りし爲聽衆は十數名に過ぎざりしと終始敬虔なる態度にて熱心に傾聴して居つた予は日蓮上人の偉大なるを説いて渴仰恭敬を捧ふべしと結び今成日醫師は信仰と本拿との接觸を示して信仰の大事なるを教誡し十時散會を告げた

この二日間の講演は住職と檀家總代理人諸氏の道を念ひ寺を思ふ志より出でて能く力を盡されたので比較的眞面目なる聽衆であつたから何等かの印象を與へたことであらうと推せらるる二十六日は兩寺檀家總代諸氏の見送を辱ふし午前十時發に乘車し二本松を去りて若松市に行つた若松市における教況は別に記述して

靈蹟開堂式

あるから(白學生記)
▲若松妙法寺開堂式
日什大正師
▲日蓮上人滅後三十三年に當り奥州
會津の城に誕生し幼にして身を佛
門に投じ比叡山の學園に入りて一念
三千の月を凝らし諸宗教の典義を
究め得て三千の學徒を領し支那能化
の地位に在りしも一朝諸所ありて
日蓮上人の教義信條に固執し經卷相承直授日
蓮の旗を領し六十七歳の老邁を擧げて南越北
馬一日居時の休みなく公家に奏願し武家と議
訴し各地に教庭を布きて大法の光輝を發揚し
處々に寺塔を創立するもの十數ヶ寺に及ぶ中
にも妙法寺は日什正師七十八歳の御時會津の
城主兼名氏の法悦の發願により建立したる寺
塔にして永く教風を東北天地に振へしも會津
戰争の當時兵燹に罹りて堂宇を失ひ爾來四十
有餘年俤人の靈蹟に見るかげもなき慘狀にて
ありしもこのたび坂本大僧正は竹内副住僧を督
し檀信徒一同と力を協せ靈蹟の復興を謀り昨
年以來本堂再建の工事に着手し十月二十日竣
工を告げたるを以て廿七日より三日開堂の
式典を擧げたり先是竹内副住僧及檀家總代人
一同は夜を日に繼て諸祭の準備に盡し各地檀
員及檀徒に案内狀を發せしが各府縣より日什
大僧師の高恩を敬慕追念の感にうたれつゝ登
山せしもの甚だ多く東京より本多日生現下野
田義野日口日主山根日東日井日井村日成田
島義淵日井日界今成日誓三上義徹の諸氏千葉
縣下より山本日悟小川玉秀藤崎通明朽木日尊
今井日省山本日悟井上睿受今井直家總總慈風

寶塔山妙法寺六十世傳燈沙門
八十八歳老比丘
大僧正 日恒

この願文奉讀了るや總代人代表は慎重なる
態度を以て祝文を朗讀せり

我が寶塔山妙法寺は今を距ると五百餘年の
昔會津城主兼公の發願に依り東北の教業
日什大正師の創建する所なり實に大正師靈
誠の靈場として顯本法華宗三箇本山の隨一
として最も重きを爲し堂塔伽藍の安壯殆ど
近郷に冠たりしを明治維新の際不幸兵燹に
罹り堂宇悉く烏有に歸せり爾來數十年の間
寺禮共に之が回復を企圖したりしが坂本日
恒大僧正當山に住職已來副住竹内無著師に
命を傳へ本堂再建を發願し不省總代等亦是
に賛し廣く淨財を一宗全體に募集し當山檀
家一統亦微力の及ぶ限りを盡し昨年三月工
を起し爾來一年有餘にして竣成し茲に本日
より三日間に亘り盛大なる開堂供養の式典
を擧げ嗚呼寺禮多年の願望遂に成就す不省
等歡喜満足何ものか之に過ぎんや仰ぎ願は
くば佛經三寶の加護を以て教光長く東光の
天地に輝き遠近普く法益を蒙り我等檀中一
同現當二世の大願を成就せん聊か葉辭を述
べて祝意を表す

大正元年十月二十七日
妙法寺檀家總代人代表
長谷川五郎右衛門敬白

午後三時式典の終りし後直ちに講演會を開き
記者は部分の役目を勤め原田希教師は吾人の

寺田泰正渡津乾秋葉純一宮川北聖山本博酒
島國樞中小橋現正久保田無福諸師石川經より宮代
向政隆石塚日孝久保田日城山形經より宮代
より岡本國正師釋國經より白井日慶師大坂府
より經木日種師妙法師福元經より石橋會幸
師福島經より中山日景師若手經より渡邊元教
師諸師及び京都市より西村去一師氏千葉經本
納町蓮福寺小林大寺寺檀家總代人四名盛岡市
は天晴れ地明かに日什正師の加被に於て發見せ
るかを覺へ一種の靈氣に充てり亦四方に告ぐ
る梵鐘の響きは何となく活氣を添ゆるが如し
午後一時第一鐘の鳴り渡るや四十餘名の大衆
は剽疾たる音楽と可愛の稚子とともに講寺よ
り道路を練りて本堂拜殿正面より入り設けの
席に着座坂本大僧正は八十八歳の高齡にして
身の自由なざるを忍びて大導師を勤めら
る其願文左の如し

願文

謹て勸濟し奉る南無本門常住の三寶諸尊來
臨影響悉知照覽あらせ給ひ
恭しく惟るに當山は是れ開祖日什大正師靈
誠の靈場にして顯本法華三箇本山の一なり
草創以來茲に五百數十名成就相續義學相
稟佛法堂堂に尊とて名聲輿論に響き經卷
直授の宗風受持成俗の法化普く布きて寺門
の宏壯殿堂の美觀盛に東北に冠たるものあり
しが不幸兵燹に罹り淨域傾に廢頽して亦
往時の盛觀を見るに由なく爾來幾十年住持

煩悶狀態と佛陀救済の關係とを詳細に述べし
今成監督布教師は信仰の眞直を説き佛陀知
見の聖境を誨へ滿堂の參詣者をして法雨に浴
せしめたり同日午後六時より同市榮樂座に於
て大演說會を開會せり是より先會津日報若松
新聞福島民友新聞に記者の紹介を以て連日に
亘り日什大正師の活歴史を掲載せられ大高評
ありし折柄なればこの日什上人の卓見主張を
聽かばやと先を争ふて集まるもの三百餘名記
者は拍手聲裡に日什上人の人格の偉大なる所
以を論じて世界大の偉人なりと結びて若松市
民の覺醒を促し開祖聖教師は若偉人日什の
題下に八十年間の活歴史を紹介し山根日東師
は月の理想に就て日蓮主義の卓越せる所以を
明にし野口日師は人々を共に教の尊重すべ
き理義を示し本多大僧正は國民思想の病弊を
指摘し來りて層々たる學見の影響なりと斷じ
東西の道徳觀を詳し去り日蓮主義の卓越論に
就て正々堂々明晰に決裁せられ拍手急激鳴る
が如く暫し己むべきもなかりしが記者は最
後に日蓮主義總論に對する世界の大事を介し
て閉會を告げたり同市に於て宗教講演が劇場
に開演せられたるは近來稀有の出來事にして
而かも中央部の名士が熱烈人の勝蹟を刺す底
の辯論を以て豊富なる資料により若松出身の
偉人日什が世界の眞聖なると論明せられたる
には未だ之を知らざりし聽家は若敬憲と追慕
の念を起し日蓮主義研鑽の道程に就けるも
のありしが如し
二十八日一天晴れ渡りて氣澄あり若松市民は
一市隨一の宏壯美觀なる本堂なりとて参詣者

の沙門信仰の權威之が復舊を企圖するもの
數回面々奉毎に志と違ひて空しく嘆嘆の聲
を吞むるのみ

日蓮上人の遺教を以て長官の公職を帯びて總
本山日蓮寺に香山すること二回老を下地の
開地に養ひしが開祖當年の奮闘を憶び奉る
と同時に此靈蹟の破綻を思ふて浩歎禁する
能はざるものあり歸己に八句を起ゆるも身
體幸に頑健志念一たび伸びて復興の淨業を
全ふせば生前の面目死後の光榮何物か之に
加へん抑も亦佛祖の鴻恩に酬ひ護情正法の
微衷を捧ぐることも佛子の福分たるを自
覺し猛然奮起寶塔山六十世の法燈を紹繼し
法子無著並に當山檀家總代今木三平川島東
右衛門佐藤三郎長谷川五郎右衛門長谷川
長八郎其他檀信一同と共に結構其經營に當
りしに時機幸に醇熟して多大なる一門眞容
の資助を得茲に本堂改革の住會に遵ふ規模
甚だ大ならずと雖も略は當年の面影を
髮鬢たらしむるものあり茲に本日より三日
間を卜し寺禮相會し肅んで開堂の式典を展
ふるに當りて管長本多日生大僧正親しく宗
務議員評議員監督布教師及各教區代表員を
率へて登山昇殿其教式を監裁す嗚呼歡喜身
心に備し
何ぞ願はくは上來勸濟の三寶諸尊宗開祖御
尊靈及聖蹟受あらせ給ひ重て添ふ今日己降
法輪當りに轉じ國運隆昌萬民得樂安泰の續
業二利開闢に法界の群萌利益潤澤ならしめ
給ひ願文一章仍面如件
總時大正元年十月二十七日

は午後一時には滿堂立錫の地なきまで詰めか
け來れり第一鐘の響くや本多大僧正親下は
四十餘名の大衆を率ひ醍醐一寶の妙味を捧げ
森嚴莊重の儀式を現り清亮たる音楽は人の心
の穢れを洗ひ去るが如く天真無邪氣の雅兒は
何となく宗教の儀禮を敬ぶるものあるが如く
論者深く快感にうたれたるものあるを見るは
是れ觀行進を終りて奏樂裡に記者は各地より
の祝電祝辭を三寶の御前に起て讀んで代讀し奉
告をなせり東京より統一團第一義會地明會妙
教婦人會日蓮主義青年會知見會親善會恩恩教
林德教育青年會慈日會國明會を始めとして登山
會一統の祝辭妙法寺五十七世日庸上人住持登山
同五十八世日基上人住持同五十九世日隆上人
住持第一同總本山妙法寺同教學財團本部同信
徒總代西村喜一郎伯耆國窪田純榮市橋龜藏陸
奧國加藤萬吉岡山縣和氣信徒一同千葉中村乾
信秋葉日慶井口善叔大津日文總會英の諸師に
して布教師中田量叔師は第十教區を代表し祝
辭を奉讀し是れ中日の親恩開堂の大興は閉か
られ午後三時より本多日生の親教ありしが滿
腔の熱淚を流して現代思想の墮落を憂へ什師
の偉徳を偲び言々句々慈愛の眞淚を以て充た
されしかば未だ宗教の光輝を仰ぎざりし聽衆
も瞑目合掌本有の靈性を喚び起して信仰の最
要なるを覺りしものゝ如し
午後六時本堂に於て大講演會を開く聽衆二百
五十餘名田久保日城師の名聲宗用教の受備せ
る日蓮主義に依るべしと説き中田量叔師は恩
を知り之に酬ゆるの精神なきものは人にあら
ず日什正師の恩徳に酬ゆるには固く此教を守る

に若くすと教誡し極水日種師は各宗教の缺點を指摘して日蓮主義の圓滿なる意義を明かにし井村日成師は肉體的養育に専らにして心的方面を注意せざるものは生命の亡びたるものと斷じ心的養育は宗教の信仰に在りて結び何れも熱心以て日蓮主義の特色を發揮し多大の感化を興へ午後十時半唱題聲裡に散會せり

二十九日午前十時同山先匠及檀家一同の祖先追善の法要を行ひ野日正師導師を勤め參拜の燒香等ありて塔婆供養を爲しこゝに覺事なく三日間の大法會は佛祖靈照の下にいと盛會を極めて終りを告ぐるを得たり

午後より日正師の靈誠參拜の爲一行五十餘名淺澤の八幡宮は上人の母清玉姫子なきが故に祈りを捧げし舊蹟にして母君靈夢に感じて懐胎し社前の石段にて産氣付きしと云ふ今尚昔を憶ふべき老杉數株と石段とありこゝを距る約三丁の北地島中に御産清水の井と稱するあり荒れ果てたる雜草の中に小碑を存し刻に云く眞善院砂結目了信女の爲寶永元年建設す」とありて後代に至り碑を立てたるものなれば當年御産水の井なるや否やはにはかに判定し難しと覺ゆ夫より淺澤妙國寺に詣りて御靈廟の扉を開いて一行は參拜の法味を捧げ親しく靈廟に拜跪して當年の苦衷を追慕し無限の靈感に上り更に歩を轉じて飯盛山に登りて白虎隊の舊蹟を探り其壯烈を思ひ一同は東山温泉の慰勞會場に着し竹内無著師及現代人は感謝の挨拶に次て本多祝下は聖日什の活精神を實現するに努力すべく誠められ歡談笑語和氣洋々裡に散會し各自隨意に若松發一聲の演道に

出羽教信

聖書布教師今成日醫師は二本松會津の連教を終り十一月一日東置賜郡栗鄉村木覺寺に着するや即日講演會を開き日蓮主義の信仰に就て囀んで含むる様に平易簡明に説述し二日僧信徒を集めて寺院經營に關する方針を指示し三日有志の求めに應じて即身成佛の本義を説き四日仲郡村寶藏寺に於て本會の意義を闡明しして信徒の生活を教示せられたり聽衆は何れも渴して水を求むる如く満足を表し信仰の増進を計るものありしに疑はずに法運萬歳なる哉

東海道教報

遠洲見付第一義會は發會以來會員相互の求道修養の熱誠強く相結合して健實なる發達を促進しつゝあるが十月十八日午後八時より例會を開き山本會長の衆生恩吉田布教師の懷疑と信仰との兩極端を捉へて哲學方面に於ける懷疑の價値を説き宗教は其哲學的基礎を包容して無疑日信の意義ならざる可らずと論議して信仰の意義を鮮明にして午後十時閉會を告げた尚ほ同會は新たに研究部及店員講話部を設けて盛んに法益を布く

福井教報

福井地方は宗教盛なりと稱するも昔はれ儀式習慣の情力に過ぎず眞に活ける人生と接觸して靈光を發揮し精神的に宗教の存在價値を認むるもの少なきの地に於て醇乎たる主義の會合はいかにならんと氣遣ふものありしが福井市妙經寺増田聖道師は婦人修養のため地明會を起し第三例會を十月十六日開催し修養上を關する日蓮主義の教訓を示して婦性の向上を促がすものありしと云ふ

送られて歸國せられたり

因みに妙法寺及妙國寺檀家現代人其盛有志は能く諸般の難務を處理し三日間の大法會を法悦のうちに送りたるは賞すべき事なりとす願はくは海外護の誠意をして一段の修養を加へ異體同心の精神を以て聖日什の主義を發現するに努めらるゝことを望む茲に感謝を表すると共に敢て希望を囑すること斯の如し(白雲生記)

神戶天晴會

第四回例會講演は十月十二日午後七時神港俱樂部に開催したるが同會員は多く實業家に於て日蓮上人信仰の念より集まるもののみなれば何れも至心に偉大なる人格の靈氣に觸れんとして敬虔なる態度を以て研究の歩を進めつゝある例により清水幹事は會報及所感を述べ榎太一氏は天晴會の振興策に就て意見を發表し中村理吉郎氏は十月十二日の會式を記念として大摩道路布教を實行すべしと警告を加へ河本政之助氏は歌米思想と日本思想との相異點及乃木將軍と日蓮上人とに就て卓越の方面を述べ橋本柳太郎氏の所感などありて鐘仰の熱度が高め柴田氏の龍の口の琵琶一曲の餘興ありて午後十一時散會を告げた

京都教報

教權佛敎の西の都も我が日蓮主義の靈光の發射する所何となく濼瀾たる意氣あるを見るいかに殿堂廟藍の安壯美觀を誇るも國民思想の指導に盡す所なくんばそはたゞ形老邁の囊中を統る一輩者には我日蓮主義は味識せられざるべし儀式佛敎や盲目信仰は惡思想の傾向を有し現代には極力排斥すべき當の勢力を占む獨り我が同志は此間に起て毅然として日蓮主義の筋義を持して能く戦ひ戦ふて癒るゝまで奮闘せよ

十月一日午後一時寺町二條妙滿寺に國禱會を行ひ野老乾爲師の求道の要義に就て懇切なる

九州教報

▲五高日蓮錢師會の成立——青年の時代の權威でなくてはならぬ青年の激濁たる元氣と燃ゆるが如き血に曙は時代の進歩は促され進運の曙光は輝くのである吾が五高の健兒は九州男子の花だといふ白

覺を有し而して亦現代の權威たらんことを企圖して居るのは勿論である其五高に未だ日蓮主義の強き力あり研究の叫びがなかつたのは遺憾であつた吾等に今の思想界を通過し來ればそのあまりに紛糾雜然たるに驚かざるを得ないいづれも時勢の議論を吐いて苦しい玲瓏玉の如き心を有する青年を誘惑して居るやうして或るものは無暗に驚かしものを追求して何等の絕對觀念をも持たずことが出來ないで煩悶し四苦八苦し或るものは古色蒼然たる陋習に執して身動きもならぬ悲々むべき慘狀にさまよつて居る

こゝに現代思想界のオトリソチヤーたる日蓮主義に遡らんとする五高日蓮誼會は熊本市の有志者の後援により十月一日校內生徒集會所に於て發會式を開いた三十餘名の會員は御眞筆の大本尊に對して一大勇猛心を以て法華經を信ぜんことを誓ひ次で發起者田中盛枝君發會の辭を述べ小林田田の講師は簡單なる講演を爲し靜寂の裡に會を開けて尚ほ幹事に當選せられたしは中井一夫中村正記小森谷光三川中盛枝の四君である本會は會員の多きを望まなげし眞面目に敬虔なる態度を以て大偉人の靈德に感ずせんとする會員を求むるのである吾人の前途は遠遠である嗚の及ぶ限り洋々たる蒼海の水が湛へて居る(眞堂櫻)

▲久しく東都の學識に在りて精力をいだし眞理の討究につとめたる中原道應師が數月前任地久留米に向はれてより渴したる者に水を給し飢たる者に食を與ふる如く精神的飢渴を醫し法悦に住せしめつゝあるこの事實は道の爲

欣ぶべきと共に亦九州人の幸福なりと云ふべきである同地の活動の状況は酒井田方面には毎月十六日筑前方面には毎月廿八日日本泰寺に於て十二日及び久留米市内に八日廿一日の二回の教誨は必ず開いて居るなほ臨時に篤信家の催しにより法話を開かれ盛に日蓮主義の發揚に努められて居る十月七日日本泰寺に於て平岡本心氏「日蓮大上人」中原布教師「人心の二面觀」八日午後七時柴山七次郎氏宅を會場とし平岡氏の「日蓮大上人」の續論下原師の「歡喜心」十三日午後三時本泰寺にて平岡氏の「勝法と護法」中原師「上人の女性觀」二十一日午後八時同寺に於て平岡氏「正直と法華經」中原師「日蓮上人の國家觀」二十二日午後七時市内新町針貝第五郎氏宅にて平岡氏の「成佛の有無を論ず」中原師「宗教的發心」に就て信仰の要義を四ヶ示さるゝに盛なることよ近き將來に於て其成績柄として見るべきものがあるであらうが「身命を捨つるほどにあらざれば」との意平なる聖訓を體識して更に大に奮闘力戰して史上を彩るに努めよ

度 告

本誌御購讀の諸賢は購讀料の儀
本月中御拂込被成下様相願上度
此段虔告候也

大正元年十一月

統一團

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大 販 賣



正價 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價發賣目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は、佛具正價發賣目錄書を御覽下候は、迅速呈仕候。此の目錄を御覽あれ。寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも坐な左の通り買物安價にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は

- 佛畫一具切
- 過去帳の類
- 大般若經
- 一切藏經
- 佛具金物一切
- 釣鐘
- 牛鐘
- 水引
- 佛子
- 香
- 珠數
- 大車
- 佛具金物一切
- 釣鐘
- 牛鐘
- 水引
- 佛子
- 香
- 珠數
- 大車
- 佛具金物一切
- 釣鐘
- 牛鐘
- 水引
- 佛子
- 香
- 珠數
- 大車

佛具卸部 通小橋西入 本舖 三法堂藤田總次

小賣部 同市三條 通大橋西入 三法堂佛具陳列場

橘 香 集

大僧正本多日生現下著

殘本數十部あり御入用のものは至急申込あれ

特製皮金文字入美本
金銀六拾錢
並製クロウシ金文字入
金貳拾錢(郵税二錢)

統一大本尊

紺紙金泥一幅
郵税共金拾錢

大正元年十一月十五日印刷發行

每月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ年前金七拾
壹錢 代金、振替貯金口座東京一二一九番へ拂込マレシ此場
合ニハ諺料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

發行所 統一團

東京市淺草區北清島町十四番地

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

大僧正本多日生師著

聖語錄

上製金八十五錢 各郵税金八錢
特製金一圓卅錢

(殘本十數部あり申)
込順により發達す

法華經は佛教全藏を調整し融會して之を綜合統一せんが爲に起りたる聖教なり、日蓮上人は佛敎諸宗を敎誡し指導して積極的統一を主唱せられたる導師なり、されば妙經及祖書に顯はれたる敎義はその旨致の深遠幽妙なるのみならず、その記述極めて多方面に亘れり、若し組織的眼光より考へを遂ぐるにあらざるばその眞意を會得すること良に難しとなす、然るに従來はその研究その布敎その信仰その行業等に於て殆んどこの考察を逸却せるもの、如一
この書は組織的の考察に資せんと欲して、法華經無量義經觀普賢經及祖書全集に就て、その要文を類聚し編纂したるものなればこの書に依りて宗の内外に於ける研究者が、法華經及祖書に對する公正なる考察を遂ぐるを得べし

目次

- 第一編 發心 感應 實在 神祕 懺悔 道義 推理 第二編 教相 内外對 權實對 絕對對
- 第三編 佛陀 三德 顯本 應現 體相 智慧 慈悲 功德 力用 權佛 餘論
- 第四編 敎法 敎法の信仰に約す 總持の信仰に約す 觀念の攝得に約す 本佛の三輪に約す
- 第五編 人身 通說 理具 事具 第六編 法界 通說 述門 本門 結歸 第七編 本尊 諸宗 佛陀の信仰に約す 敎法總持觀念に約す 結歸本佛の三輪に約す 第八編 行法
- 總要 信仰 安心 道義 第九編 得益 總要 絕對の益 相對の益 第十編 批判
- 第十一編 警策 第十二編 調育 第十三編 祖傳

(振 口 警 振)
東 京 一 二 九 番

團 一 統

統一

第貳百拾四號

日蓮上人の警訓

汝後生をば餘處の事とのみ思ふあはれさ、我が身を思はぬ者かな、人間に生を受くる事は盲龜の浮木に値へるが如しとこそ佛は説き給ふ、恒沙の宿善を俱して希に受けたりし人間に、尙又得難き佛法に値ふ事を得たりしに、佛道修行をばなさず、夢幻の如くなる一旦の身を思ふて生涯空しく暮して、今かゝる憂目を見ることの愚さよ、汝さても佛法結縁をば何計りなしたりけん、説法などの聽聞をもせざりや

大正元年十一月十五日發行(日五十月每)行發日五十月一十年元正大
可認物標郵種三第日四廿月二年十三活明

